

# 張愛玲と台湾文学史

鈴木基子

## I 序

張愛玲は1920年に上海で生まれ、1940年代に上海の文壇に踊り出た。読者の人気を呼び、またたく間に中国で最年少の女流作家となった。彼女がこの世に遺した名著は、後世へ大きな影響を与えたが、中国文学における彼女の位置付けに関する問題については、意見が分かれ、論争が続いている。

張愛玲が台湾文学史に入るかどうかについて、ある人は、彼女が生まれも育ちも台湾ではないことから、台湾文学史に書き入れるべきではないと考えている。しかし、またある人は、彼女が「いもっ子（台湾人）」ではないとしても、彼女の作品が台湾に与えた影響は確かに深く大きいことから、彼女を台湾文学史に書き入れるべきであると考えている。台湾海峡の兩岸における数々の要素、とりわけ政治的影響が、この問題を更に複雑にし、公平で合理的な解決の道を見出せなくしていた。

当然、これは古くからの問題であり、過去に多くの学者から専門的な意見が発表されている。筆者は第三者の立場で、一人の日本人研究者の角度から参考意見を述べる。

張愛玲文学の台湾を中心とした中華圏における受容を概観し、戦後顧みられていなかったが、1960年代に夏志清によって台湾で張ファンが生まれたことの意味合い、日本の文学会の見方、その後2015年までの変化などを探る。

## II 張愛玲と台湾の関係

### 1 張愛玲の上海での成功の軌跡

1920年に出生した張愛玲は、聖マリア女学校の時、校内刊行物に何度も文章が掲載された。1940年、張愛玲は20歳の時、雑誌『西風』に『我的天才夢』の文章を発表し、初めて賞を獲得した。その後、彼女は当初は香港大学を卒業後、ロンドンへ行き学業を深めたいと考えていた。高校卒業後にヨーロッパで戦争があり、彼女のイギリス留学の夢はつぶされてしまい、代わりに香港大学へ進学した。だが、ここで日本の攻撃によって大学の授業が停止し、彼女は上海に戻って小説を書き始めた。1944年に彼女は最初の小説集『傳奇』を出版し、同年に『流言』も出版した。また、1946年には『傳奇増訂本』を相次いで出版した。このように、1944年前後の数年間は、張愛玲が幸運に恵まれ、彼女の作品が最

も人気のあった年代であった。

一方、日本におよそ半世紀統治された台湾は、1945年8月の日本降伏後、中華民国の領土として接収されることとなった。「1946年10月25日、台湾の行政長官公署が、新聞の日本語欄を廃止すると正式に発表してからは、日本統治時代の文学の伝統は断絶状態となった。台湾の作家は、仕方なくこの言語政策の衝撃を受け入れるしかなかった。日本統治時代、台湾人は中国語の使用が制限され、戦後初期には日本語の使用が制限されていた。台湾の作家は慣れ親しんだ言語を中断されることを絶えず強要され、再び別の言語を学ぶことでしか、創作を続ける事ができなかったのである」<sup>1)</sup>。1949年、蒋介石が戒厳令を発令した。当時台湾の標準中国語を普及させる「国語」教育はまだ普及していず、大部分の台湾の作家は以前の「国語」であった「日本語」での読み書きに慣れていたので「国語（＝標準中国語）」の使用に慣れず、文章を発表する機会も大幅に減少した。

こうして見ると、40年代の台湾と張愛玲との間には、特別な関係が見あたらない。張愛玲が名を挙げた年代は、まさに台湾では統治者が日本から国民党に替わり、上海の租界は凋落し、中国各地では国共内戦が激しく繰り広げられていた時代であった。

## 2 東西冷戦がもたらした不思議な縁

1950年に朝鮮戦争が勃発すると、世界の2大大国である米国とソ連は、冷戦を展開し始めた。「台湾は、国民党政府が米国の経済・軍事援助に依存していたため、反共国家の一員になり、台湾では共産党を肅清する『白色テロ』活動が行なわれた」<sup>2)</sup>。このような状況の下、台湾の50年代における文学の主流は当然、反共文学であった。まさにこの頃、台湾の統治者となった中国大陸から来た外省人は大いに「反共文学」の提唱を始め、日本語を極力排除するとともに、標準中国語の普及に努めていた。

一方で、50年代は張愛玲にとって受難の年代であった。共産党統治下の中国大陸では、厳しい思想統制が行われており、人々の生活は困窮していた。張愛玲は1952年中国を離れる決心をし、同年7月イギリスの植民地である香港に向かった。張愛玲は1954年、香港のアメリカ新聞処に勤務していた時、『秧歌』と『赤地之恋』という2篇の英語小説を書いている。この2篇の小説について、ある人は「反共」小説と言い、またある人は「反共ではない」小説であると言っている。だがいずれにせよ、これら2篇の小説の発表は、当時台湾が置かれていた国際情勢と、海外の文学作品に触れることを渴望する国内の文学愛好者の飢餓的な心情と一致していた。張愛玲のこれら2篇の作品は、こうして順調に台湾に上陸し、急速に根を下ろし、花を開かせることになった。

朝鮮戦争が終わり、米国とソ連の冷戦期に、台湾は西側陣営に加わったため、米台関係はいつそう緊密になった。台湾は経済発展に大きく力を入れ始め、台湾人の日常生活が急速に改善されると、欧米化された現代主義思想も急速な発展を見せ始めた。

『台湾的文学』の戦後台湾文学によると「50年代の反共文学は基本的に国民党政府に従って台湾に撤

1) 莊萬壽, 陳萬益, 施懿琳, 陳建忠『台湾的文学』群策會李登輝學校, 2004年12月, p66.

2) 前掲書『台湾的文学』p71.

退してきた第1世代の『外省籍』の作家が創作したものである。だが、反共と国家再興の望みが無くなるにつれ、戒厳令下の台湾社会で至るところにタブーが溢れ、新世代（第2世代）の作家たちは、このような精神的苦悶をあらわにし、脱け出したいと考え始めたため、現代主義文学は、こうして当時の文壇の主流となったのである<sup>3)</sup>。

### Ⅲ 張愛玲の台湾文学への影響

#### 1. 張愛玲の台湾渡航

1961年、コロンビア大学の夏志清教授（Hsia Chih-ting）は、その著書 *A History of Modern Chinese Fiction* 『中国現代小説史』（Yale University Press）の中で、張愛玲の作品を高く評価した。これによって張愛玲は中国文学界において一挙に有名になり、不動の地位を固めることとなった。これ以前、張愛玲の作品は、台湾では既に誰もが知るものとなっていたが、彼女自身は国民党統治下の台湾に対し、「敬遠」する気持ちを持っていた。1961年10月13日になって、彼女は初めて、台湾の地を踏んだ。

張愛玲が台湾に滞在した期間は1週間と短く、彼女と会った人物も多くなかった。張愛玲の台湾文学への認識に関して、高全之はこう述べている。「文学に対する意見の表明において、彼女は台湾に対し白紙の状態であった」「不思議なことに、彼女は台湾文学について、文字の中では終始無言であった<sup>4)</sup>。彼女は台湾文学に対して、ほとんど無関心であった。高全之は、「台湾は、張愛玲の小説芸術を保護・保存してきた重要な土地であった。だが、台湾文壇と彼女の文学面における意見の交換は、もし王禎和がいなければ、まるで激しい片思いのようであった<sup>5)</sup>、と述べている。張愛玲の作品が台湾でかなり人気であろうとも、彼女は台湾に対し、自分自身の感情を表したくないようであった。台湾文学界はひたすら張愛玲を熱愛していたが、彼女は台湾と終始一定の距離を保ち、あまり親しく近づきたくない様子を見せていた。

張愛玲と台湾の関係で言うならば、張愛玲作品を出版し続けてきた皇冠出版社を無視することはできない。皇冠出版社の長期に渡る協力と支持があったため、この「共産中国」出身の女流作家の作品が、「反共」の地にその花を咲かせ、国内外に名声を響かすことができたと言えよう。

#### 2 見過ごせない「張ファン」を開拓した皇冠出版社の功績

張愛玲のいくつかの作品、例えば1943年の『心経』、1944年の『連環套』等は、かつて雑誌『万象』に発表された。雑誌『万象』は、台湾皇冠文化出版有限公司（以下、皇冠出版社と記す）の前社長である平鑫涛の伯父の平襟丞が、中国大陸に設立した出版社である。張愛玲と皇冠出版社が知り合った経緯

3) 前掲書『台湾的文学』p74.

4) 高全之「張愛玲與王禎和」『王禎和的小説世界』三民書局、1997年2月、p160.

5) 前掲「張愛玲與王禎和」p161.

について、当時の社長・平鑫濤は回想し語る。「『怨女』は1966年4月に出版され、お互い気持ちよく協力できた。それから張愛玲の全ての作品がいずれも『皇冠』から独占的に出版されるようになった。若い頃の張愛玲と平襟亜氏の雑誌『万象』が培った強い文学の絆は、その後『皇冠』との順調な長期提携につながり、前後50年に渡って、二人の平氏の親族の出版事業と緊密に繋がっていった。このような2世代にまたがる縁は、もしかすると彼女が最初に出版した本の名前と同じく、もう一つの『伝奇』と言えるであろう」<sup>6)</sup>。

香港に住む宋淇夫妻の紹介を通じて、台湾皇冠出版社は張愛玲と知り合い、それから両者は50余年の長きに及ぶ友好協力関係を築いてきた。この間、皇冠出版社では、次々に『怨女』『張愛玲短編小説集』『秧歌』『流言』『半生縁』等の張愛玲の作品を出版してきた。台湾の「張ファン」開拓において、皇冠出版社の功績は実に大きい。

### 3 「張派」作家の揺りかごの地

台湾の「張ファン」は特に多く、「張ファン」から「張派」作家に変わるのも少なくない。「張ファン」が生まれた理由は、もちろん張愛玲の才能と感動的な作品、文章の独特な描写術、書き言葉と話し言葉が半々の文字運び、読後感の素晴らしさ、何度読んでも飽きない、といったことが挙げられる。だが台湾に「張ファン」「張派」作家が特に多いのは、張愛玲の前夫である胡蘭成と関係がないわけではない。

張愛玲の前夫であった胡蘭成は抗日戦争時期、漢奸（民族の裏切り者）と批判され、戦後日本に逃亡した前汪兆銘政権の官吏であった。彼は1974年、招聘に応じ台湾に赴き、教壇に立った。胡蘭成が台湾で教鞭を執っている間、朱西寧と良好な信頼関係を築いており、ここから朱家との付き合いが密接になっていった。その後、胡蘭成の強力な支持の下、朱西寧の娘朱天文が正式に「三三書房」を設立し、台湾で「張ファン」を開拓し、「張派」作家を育む揺りかごとなった。これ以降、張愛玲の文学は台湾で正式に根を張り、急速に広まって、「張派」作家が次々と誕生することになった。王德威教授は「落地的麥子不死—張愛玲の文學影響力與『張派』作家的超越之路」の中で指摘する。張愛玲の影響を受けた台湾の作家には、白先勇、施叔青、施憑藉、朱天文、朱天心、丁亜民、蔣曉雲、林耀德、林俊穎、楊照、蕭麗紅、蔡素芬、蘇偉貞、袁瓊瓊らがいる<sup>7)</sup>。また、陳秋雯は、李昂、三毛、郭強生、林裕翼、朱秀娟、廖輝英らもみな張愛玲の影響を受けた台湾の作家である<sup>8)</sup>、と言う。

更に張愛玲文学の台湾への影響の大きさは、以下の統計の数字を見れば一目瞭然である。「台湾国家図書館の資料の記載によれば、台湾では1998年10月まで、張愛玲研究の評論は533篇、伝記は196件に達する。張愛玲の風格と影響力は特異で、時が経っても衰えることがない。この現象は『張愛玲は台

6) 平鑫濤『逆流而上』皇冠文化出版有限公司、2004年2月、p106。

7) 王德威「落地的麥子不死—張愛玲の文學影響力與『張派』作家的超越之路」蔡鳳憶編『華麗與蒼涼—張愛玲紀念文集—』皇冠文化出版有限公司、1996年3月初版、1997年8月三刷、p196-210。

8) 陳秋雯「文藝創作者對張愛玲小說的藝術接受」『張愛玲小說在台灣の接受現象』台湾・國立中山大學中國文學研究所碩士論文、2005年6月、p74-113。

湾にあり』という事実を、合法的に裏付けたことにほかならない<sup>9)</sup>。

張愛玲文学が台湾に与えた影響については、プラスに評価するものもあれば、マイナスの批評もある。例えば、「一方で彼女は『中国伝統』の代表であり、もう一方で彼女はまた『西洋の買弁』（上海で生まれたという原罪に加え、彼女と胡蘭成の関係は、更に罪証を確かなものにして）、あるいは『反民族』（抗日戦争が激烈な中、占領地域にありながら、男女の愛情小説ばかりを書いていた）代表的人物でもあった<sup>10)</sup> という。批判的意見に対し、冷静に耳を傾けるのは大切なことだが、張愛玲文学の台湾に与えた影響は、誰も否定できない事実である。また、陳芳明はこのように述べている。「張愛玲の影響は、台湾の広い地域、異なる世代、異なる性別、異なるエスニックグループの作家に浸透した<sup>11)</sup> このため、彼は、「張愛玲は必ず台湾文学史に書き入れられる<sup>12)</sup>」と、会議で発言した。

#### IV 台湾意識と「郷土文学」

##### 1 「郷土文学」の目覚め

70年代は、台湾国内外の政治、経済、社会、文化等において、大きな変化が多く起きた時期であった。中華民国は国連を脱退し、国連の代表権が中華人民共和国になり、1972年には日本と1979年には米国と国交が断たれた。このような大きな変化に直面して、すでにある程度の基礎を固めていた台湾文学は、中国文学の影響からの離脱を摸索し、独立した近代化路線の追及を始めた。「郷土文学論争」はすなわち、この年代に幕が切って落とされた。

「このような状況は、台湾知識分子の台湾問題に対する大反省をもたらし、また、いわゆる『郷土回帰』運動を生み出した<sup>13)</sup>。「今日、台湾は国際的にしきりに圧力を受け、多くの作家は台湾こそが、彼らの最も重要な根拠地であると意識し始め、彼らはこの土地における人々や諸問題に、その関心を向けるようになった<sup>14)</sup>。文学界における台湾意識の目覚めは、「郷土文学論争<sup>15)</sup>」を促し、台湾文学に新たな境地を切り開いた。

80年代に入ると、台湾文学は「美麗島事件<sup>16)</sup>」の衝撃を受けたことにより、数多くの「政治文学」の誕生が促された。いわゆる「政治文学」とは、政治の傷跡を主な内容として描いた文学作品を指す。

9) 張殿「注視張愛玲」『聯合報』、1999年3月22日。41版讀書人周報 聯合知識庫 <http://udndata.com>、2006年7月31日データ取得。

10) 廖咸浩「迷蝶：張愛玲傳奇在台灣」『當代』第147期、1999年11月、p100。

11) 陳芳明「自序：我的後殖民立場」『後殖民台灣—文學史論及其周邊—』麥田出版、2002年4月、p19。

12) 同上。

13) 前掲書『台灣的文學』p79-80。

14) 前掲書『台灣的文學』p81。

15) 山口守編、藤井省三、河原功、垂水千恵、山口守「序章 台湾文化のクレオール性」『講座 台湾文学』国書刊行会、2003年3月、P29-30 参照。

16) 「1979年12月、高雄市で警官隊と民衆の間に起こった衝突事件。双方に多数の負傷者を出した。事件発生後、民衆暴動の指揮をとったとして、反体制的雑誌『美麗島』誌の編集者、発行責任者等14人が反乱罪の嫌で軍事法廷で裁かれた」。中川昌郎『台湾をみつめる眼 増補新版』田畑書店、1992年10月初版、1995年5月増補新版、p111。

藤井省三「1980年代以後の台湾文学—美麗島事件から現在まで」前掲書『講座 台湾文学』p211-214 参照。

1987年7月に戒厳令が解除されると、台湾人はついに日の目を見ることができた。台湾は民主化の過程において、平坦な道を歩んできたのではなかった。同様に、文学界もまた先見の明がある文人たちが、啓蒙の声を上げ続け「文学の自由」を得ることができた。

80年代の台湾では、人々の政治意識の高まりと、言論の自由の発展に伴って、過去に覆い隠されてきた社会の汚点が次々に暴かれ始め、作家たちの関心は、政治問題に限らなくなった。いわゆる「社会的弱者」への関心、「社会的弱者」に味方する風潮が一時的に流行する。新たな文学として「エコロジー文学」、「女性文学」（フェミニズム文学）、「原住民文学」、「台湾文学」等が、百家争鳴のごとく登場し、台湾文学は多元化の礎を築くこととなった。「政治文学」から変化し発展してきた台湾文学は、「主流体制へ反抗する精神、弱者の味方として、台湾文学発展の多元化現象を生み出した」<sup>17)</sup>。

## 2 台湾文学の名著となった『半生縁』

広く知られている通り、台湾はエスニックグループの幾度にもわたる移民によって形成された国家である。そのため、台湾の文学作品は往々にして、それぞれのエスニックグループの異なる利益と、異なる年代におけるエスニックグループ間の歴史的因縁を反映するものであった。「エスニックグループの問題は往々にして過去の歴史とは、切っても切れない関係にある」<sup>18)</sup>。このような状況は、文学の領域において、より顕著にその形跡が示されている。

1999年1月聯合報（訳注：新聞社）系主催の「台湾文学『名著』（原文は「經典」，以下同）選出会議」において、153冊の名著の中から投票によって30冊が、台湾文学の名著として選出された。同年の3月19日から21日まで、「台湾文学名著シンポジウム」も行なわれた。張愛玲の『半生縁』が台湾文学の名著の1冊として選出されたのである。今回の名著選抜結果について、名著選抜投票委員の一人である王徳威はこう述べている。「私の選択の中でも、いくばくかの躊躇<sup>ためら</sup>いがあった。例えば、張愛玲である。彼女と台湾との関係は、非常に興味深い文字の因縁である」<sup>19)</sup>。また、蘇偉貞もこう語っている。「地理的空間から言えば、張愛玲の入選について、いくらかの問題が浮き上がってくるのは避けられない。もちろん、我々はこれらの問題に対し特に向き合わなくても良いのかもしれない」<sup>20)</sup>。一方、張愛玲の『半生縁』が台湾文学の名著に選出されるのに反対する者もいる。これらの人々は、張愛玲の作品が台湾文学に極めて大きな影響を与えていることは否定しないが、彼女は「いまだかつて台湾に定住したことがなく、本に書かれているのも上海、香港に関するものばかりである」<sup>21)</sup>と考へ、彼女を「台湾文学史」に書き入れることに同意できないという。その他にも、「ただ台湾で出版され、台湾に対し影響がありさえすれば、台湾文学の名著というのであれば、シェークスピアの作品も台湾文学の名著と見なしてよ

17) 前掲書『台湾的文学』, p90.

18) 前掲書『台湾的文学』, p93.

19) 陳義芝主編『台湾文學經典研討會論文集』行政院文化建設委員會, 聯經出版事業公司, 1999年6月初版, p513.

20) 前掲書『台湾文學經典研討會論文集』, p518.

21) 賴素鈴「張愛玲算不算台灣作家?」『民生報』, 19版藝文新聞, 1999年3月20日. 聯合知識庫 <http://udndata.com>, 2006年7月28日データ取得.

いのではないか？」<sup>22)</sup>と疑問を述べる人もいる。張愛玲の作品に関して、これほど多くの異なる意見があるため、思想背景について検討を進める。

### 3 張愛玲の思想背景

まず彼女の最初の夫である胡蘭成の張愛玲への見方を見てみよう。胡蘭成は、1945年に雑誌『天地』に発表した文章の中で、「ある人は、張愛玲の文章は革命的でないというが、張愛玲の文章には元々彼らが知るようなあの種の革命的なものはない。—（略）—それゆえに、張愛玲の文章はプロレタリアートのでないと言われても仕方がない」<sup>23)</sup>と述べている。また胡蘭成は『民国女子』の一文の中でも、このように記述している。「愛玲は、理論の本を読まない。歴史も好きではない」<sup>24)</sup>。胡蘭成は明確な政治理念を持った人物であるが、彼の目を通して見た張愛玲は、まるで特定の思想観念と時代感のない女性であつたらしい。張愛玲のほとんどの小説は当時の汪精衛政権の雑誌上で発表されたものである。つまり、当時上海で発行されていた汪政権の影響下にあった雑誌が、すべて日本の厳格な検閲の下にあったからこそ、政治に触れない毒にも薬にもならない「純文学」を追求させる余地があったのである。古蒼梧によれば、「日本統治時代の上海は、抗日的な政治思想と左翼的な政治文化運動が禁止されているので、ちょうど張愛玲にその才能を大いに発揮できる機会を与えることになったのである」<sup>25)</sup>。古蒼梧はまた「張愛玲と胡蘭成は、どちらも文学と政治が関連性を持つことに賛同しなかった」<sup>26)</sup>と述べる。当時は非常に特殊な時代であった。つまり、このような時代だからこそ、張愛玲の才能が全面的に発揮できた。張愛玲の全盛期の上海時代に書かれたものは、ほとんどが「男女の恋愛」について語られた作品である。例えば、『伝奇』『流言』等が格好の良い例である。

## V 学者と評論家の意見

### 1 夏志清

夏志清は、最初に張愛玲を「中国文学史」に書き入れる資格があると認めた著名な学者である<sup>27)</sup>。彼が1961年に米国ニューヨークで著した *A History of Modern Chinese Fiction* 『中国現代小説史』（Yale University Press）は、欧米各国における中国現代小説史の研究に新たな1ページを切り開いた。その著書の中で、張愛玲について「今日の中国で最も優秀で最も重要な作家である」<sup>28)</sup>と称賛している。夏

22) 蔡美娟「搶救台灣文學」記者會，是誰之「經」？何人在「典」？台灣筆會等團體發表聲明『聯合報』，03版焦點，1999年3月20日。聯合知識庫 <http://udndata.com>，2006年7月28日データ取得。

23) 胡寬乘「張愛玲与左派」金宏達編『回望張愛玲 華麗影沉』文化藝術出版社，2003年1月，p30。原載『天地』1945年6月第21期。

24) 胡蘭成『民國女子』遠景出版，2004年10月，p290。

25) 古蒼梧『今生此時今世此地：張愛玲，蘇青，胡蘭成的上海』，Oxford University Press，牛津大學出版社，HongKong，2002年，p58。

26) 前掲書『今生此時今世此地：張愛玲，蘇青，胡蘭成的上海』，p82。

27) 夏志清，C.T.Hsia 1921年2月—2013年12月，中国上海浦東生まれ，江蘇人，コロンビア大学教授。中国文学評論家。

28) 夏志清著『*A History of Modern Chinese Fiction in Chinese*』，Yale University Press，劉紹銘等譯『中國現代小説史』

志清はその著書の第 15 章すべてを割いて、張愛玲の『秧歌』『金鎖記』及びその他一部の作品を紹介するとともに、張愛玲の境遇、家庭、作品の特徴及び思想背景等についても詳しく述べている。夏志清は『秧歌』を「不朽の名作」<sup>29)</sup>と評価し、張愛玲の「小説に見る人情味溢れる描写は、普通の凡庸な作家の及ぶところではない」<sup>30)</sup>と強調している。夏志清は『金鎖記』を、「中国古来最も偉大な中篇小説である」<sup>31)</sup>と考えている。夏志清の張愛玲に対する評価と叙述は、冷静である。張愛玲にとって自分を肯定してくれるものと感じられるもので、これが張愛玲が全面的に彼を信頼し、何事も彼に教えを請い、生涯手紙のやり取りをした主な理由かもしれない。

## 2 葉石濤

張愛玲を「台湾文学史」に書き入れるべきであると主張するのは、台湾の作家の葉石濤先生である<sup>32)</sup>。1987年、彼は『台湾文学史綱』という本を著した。彼は「50年代の台湾文学—理想主義の挫折と退廃—」の中で、「張愛玲は40年代における傑出した作家の一人である」<sup>33)</sup>と強調している。彼は『秧歌』の内容と張愛玲の略歴、それに創作の風格を詳細に紹介すると共に、彼女の作品を称賛し、「台湾に数多くの読者を擁している」<sup>34)</sup>と述べている。また、その本の日本語版「序文」の中で、「台湾文学は、台湾の土地や人民の上に立った文学で、決して中国文学や日本文学の亜流ではない。日本語や中国語で書いた作品であるとしても、台湾文学は決して日本文学や中国文学の一部分ではない。それは、アメリカ文学は英語で書かれていても、決して英国文学の一部分ではないというのと同じ理屈である」<sup>35)</sup>と述べている。何人かの郷土文学出身者は、張愛玲の「台湾文学史」上における存在意義を完全に否定しているが、葉石濤は彼女の貢献を公平に冷静に評価し、張愛玲は「台湾文学史」に書き入れることができると考えている。葉石濤は、当時の台湾情勢は、確かに反共文学が必要とされており、張愛玲の反共文学における台湾への貢献は非常に大きく、また多くの台湾読者の支持を得ていた、と考えている。

## 3 陳芳明

もう一人、張愛玲を「台湾文学史」に書き入れても良いと主張しているのが、陳芳明教授である<sup>36)</sup>。陳芳明は台湾・高雄の出身で、台湾文学本土化論者である。台湾大学大学院を卒業後、米国に留学し、1992年に台湾に帰国するまでずっと米国に滞在し、台湾文学を専門に研究してきた。彼は「共産中国」

香港中文大學出版社、2001年、p335.

29) 前掲書『中國現代小説史』、p335.

30) 前掲書『中國現代小説史』、p360.

31) 前掲書『中國現代小説史』、p343.

32) 葉石濤、1925年11月—2008年12月、台湾台南出身、作家、評論家、西川満の『文芸台湾』編集.

33) 葉石濤「第4章 50年代的台灣文學—理想主義的挫折和頹廢」『台灣文學史綱』春暉出版社、1987年2月初版、2003年10月再版、p93.

34) 前掲書『台灣文學史綱』、p94.

35) 葉石濤著『台灣文學史綱』文學界雜誌社、1987年2月、中島利郎、澤井律之訳「日本語版序文」『台湾文学史』研文出版、2000年11月 pi.

36) 陳芳明、1947年6月生まれ、台湾高雄市出身、台湾文学研究者、作家、国立政治大学教授.

出身の張愛玲と、「反共」の台湾の人々が50年代に築き上げたこの普通ではない因縁は、探究するに値する問題である、と考えている。彼は次のように強調する。「左翼史観を中心とする中共の歴史家は、張愛玲の『反共』的立場を受け入れることができないのは明らかである。同様に、右翼史観を中心とする国民党の歴史家は、抗日文学の歴史評価に偏っており、張愛玲の汪兆銘時代における上海での作品に対し、当然、重視することはない。たとえ香港で出版された中国新文学に関する著作であっても、上海の『孤島文学』を討論する時にも、故意に張愛玲を避けて語ろうとしない。そのため、今日に至るまで、張愛玲の文学的評価は中国新文学史の発展の脈絡の中に組み入れられることは、ほとんど不可能である。それに比べ、張愛玲が台湾で獲得した待遇は、おそらく彼女本人の想像をはるかに超えていたのではなかろうか」<sup>37)</sup>。

陳芳明は「張愛玲文学を台湾で紹介することができたのは、やはり彼女が香港で執筆した『秧歌』が『反共文学』と誤解されたからである。この種の誤解は、ちょうど二重の権力中枢の要求に合致し、ついに張愛玲が台湾に入る関門を打開したのである」<sup>38)</sup>と分析する。陳芳明は、『秧歌』と『赤地之恋』の2冊の小説は、当時の国際情勢のニーズによって誕生したと考えている。当時の台湾は、国際社会における地位が急速に低下していた。米ソが冷戦で対立する中、米国の支援を仰ぎ、米国に頼って生き延びることを台湾が選んだのであろうし、米国も「共産中国」に対抗するために、台湾を必要としていた。それゆえ、これは当時の国際情勢によってもたらされた結果であろう。張愛玲の作品は、確かに台湾で大きな影響力がある。陳芳明はこの観点をもとに、張愛玲は「台湾文学史」に書き入れることができると主張する。

更に陳芳明は2011年10月の『台灣新文學史』（聯經出版事業股份有限公司）の中で、「1960年代に張愛玲の小説が流行っていた時に、現代主義の拡大はすでに最高峰に達していた。台湾の作家に改めて創作技能の再考をさせることで、現代文学の世代の重要な風格を樹立することができ、彼らの多くの作品が『名著』に高められ、その後の台湾文学が現代主義的で、なおかつ写実主義的である道筋を開くことができた」<sup>39)</sup>と言う。陳芳明はこの点を特に重視し、張愛玲の名は「台湾文学史」に入るべきと、『台灣新文學史』<sup>40)</sup>に記載する。

#### 4 黄得時

「台湾文学史」について明確な条件を提示したのは、黄得時教授である<sup>41)</sup>。黄得時は台湾・台北の出身で、台湾帝国大学を卒業し、『台湾文学』雑誌社にて頭角を現した後、台湾大学の教授になった台湾文学界における傑出した人材の一人である。彼は、1943年に出版された『台湾文学史序説』の中で、初めて「台湾文学史」に書き入れる作家に必要な5項目の条件を提示した。「1. 作者は台湾出身であり、

37) 陳芳明「張愛玲與台灣文學史的撰寫」『後殖民台灣—文學史論及其周邊—』麥田出版、2002年4月、p70.

38) 前掲「張愛玲與台灣文學史的撰寫」、p84.

39) 陳芳明『台灣新文學史』上、聯經出版事業股份有限公司、2011年10月初版、p373.

40) 前掲書『台灣新文學史』上、P343-344、p369-373.

41) 黄得時、1909年11月—1999年2月、台湾文学研究者、作家、記者、台湾大学教授.

その文学活動（ここでは作品の発表並にその影響力、以下同じ）も台湾に於てなされた場合. 2. 作者は台湾以外の出身であるが、台湾に永住し、その文学活動も台湾に於てなされた場合. 3. 作者は台湾以外の出身であるが、一定期間だけ台湾に於て文学活動をなし、それ以後、再び台湾を去った場合. 4. 作者は台湾出身であるが、その文学活動は台湾以外の地に於てなされた場合. 5. 作者は台湾以外の出身で、しかも台湾に渡来したこともなく、単に台湾に関係を有する作品を書き、台湾以外の地に於て文学活動をなした場合<sup>42)</sup> などである。

もしこれらの条件に照らして張愛玲を評すると、彼女は「台湾文学史」に書き入れる資格がなくなってしまう。もし、その中の第三の条件を考慮しても、張愛玲は一度台湾に来たことがあるだけで、滞在期間もわずか1週間程度であった。彼女が書いた台湾に関する文章も1篇の散文「重回前方」(A Return to the Frontier)のみであり、台湾で文学活動を行っていたことがある、とは言えない。そのため、彼女を「台湾文学史」に書き入れようとする、必ず大きな議論を引き起こす。

## 5 彭瑞金

黃得時と同様に、「台湾文学史」について厳しい見方をしているのが彭瑞金教授である<sup>43)</sup>。彭瑞金は台湾・新竹出身の客家人で、静宜大学の教授である。彼は「『台湾文学は本土化を第一の課題とすべき』の文中で、「本土化」とは、この土地にある文学を凝縮するのがキーポイントであり、「作品の中に、台湾というこの土地の人々の生活の歴史と現実を誠実に反映し、この土地に根を下ろした作品でありさえすれば、我々はそれを台湾文学と称してもよい。そして『本土化』とは、台湾文学であるかどうかを検証するフィルターである」<sup>44)</sup>と述べる。

1997年に彼が出版した『台湾新文学運動40年』の本の一節、「嵐の中の新文学運動1950-1959」の中で、戦闘を標榜する「反共文学」について、こう書かれている。「『台湾に移ってきた作家』（張愛玲は作品のみが台湾に来て、本人は台湾に長期間住んだことがない）は、一貫して例外なくあからさまに『共産党の諸悪』を訴えていた」<sup>45)</sup>。

彭瑞金の張愛玲への見方は、葉石濤と異なる。彼はただ張愛玲の名前を他の作家とともに併記したに過ぎず、彼女について全く詳細な評価も紹介も行っていない。見たところ、彭瑞金の台湾文学本土化の理論からは、張愛玲を「台湾文学史」の中に書き入れることを認めるのは難しい。

## 6 古遠清

古遠清教授<sup>46)</sup>によると、1971年の劉心皇『現代中國文學史話』（台北・中正書局）、1976年の周錦『中

42) 黃得時（日語）「台灣文學史序説」『台灣文學』3巻3號、1943年7月、p3.

43) 彭瑞金、1947年生まれ、台湾新竹出身客家、台湾文学評論家、静宜大学教授。

44) 彭瑞金『台湾新文学運動40年』春暉出版社、1997年8月初版、2004年9月再版、p215.

45) 前掲書『台湾新文学運動40年』、p81.

46) 古遠清、1941年生まれ、広東省梅県出身、香港中文大学、嶺南大学客員教授、中南財經政法大学台湾香港文学研究所所長。

『國新文學史』（台北・長歌出版社）、1997年の『二十世紀中國新文學史』（板橋・駱駝出版社）に張愛玲の名前は見当たらない。1971年の『中華民國文藝史』（台北・中正書局）<sup>47)</sup>は台湾で、初めて張愛玲の創作に言及した、と書く。1971年2月の政府系出版の文学史『中華民國六十年文藝史』に張愛玲は入ったが「辺境」であり、彼女のいわゆる反共小説と言われている『赤地之恋』でさえ出版社に一方的に削除された後やっと出版でき、禁書になったことさえある<sup>48)</sup>。当時、中国大陸だけでなく、台湾でも、張愛玲の扱いは、順調ではなく多難であった。

古遠清は、その原因について10の理由を挙げている<sup>49)</sup>。まとめると1. 1949年5月から台湾では戒厳令がひかれ、中国大陸の30, 40年代の文芸は禁書となっている。2. 国民党は共産党作家を「共匪作家」と呼んでいる。張愛玲の「十八春」は左翼文芸作品で、「小艾」は国民党を非難する内容があった。3. 散文「自己的文章」のようなものは、蒋介石の共産党に対する討伐の戦闘文学の宣伝に不利である。4. 胡蘭成が認めるように、張愛玲は拝金主義者のみならず個人主義者でもある。5. 台湾当局は1954年から「赤の毒」「黄の毒」「黒の毒」等の一掃に力を入れている。張愛玲の作品は、男女の愛の描写に重点が置かれ、それは排除すべき「黄の毒」の対象である。6. 当時は、台湾澎湖島金門馬祖を死守すべき時代であったため、国民党は「軍人文学」「反共文学」を必要としていた。7. 張愛玲の作品をこの時期に褒め称えることになる、それは時代への逆行であり、ある種の風刺に他ならない。8. 特に、国共内戦で敗れた国民党が台湾に撤退する時、張愛玲は国民党とともに台湾へ移り住まなかったため、国民党に対する忠誠心の欠如が疑われる。9. 奇妙にもこの時期に、漢奸の胡蘭成が台湾の文化大学で教鞭を執っており、共産中国出身の張愛玲を新文学史にその名を刻むのは、きわめて不適切である。10. 左翼の唐文標の批判があり、台湾の水晶教授の擁護があった。

水晶<sup>50)</sup>は邵迎建教授によると「はじめて張愛玲を研究した専門書」を出し、「夏志清のように反共政治の傾向がなく、純粹に文学芸術の視点から出発し」<sup>51)</sup>西洋の文芸理論に基づき、張愛玲を分析したと述べる。

このように、台湾にあってさえ、国民党が支配していたので、政治的に国民党に有利となる文学でなければ、公に認めるわけにはいかなかった。「名著選出活動」の時も、台湾内部の国民党（藍）と民進党（緑）が、台湾独立と複雑に絡んで論争が繰り広げられた。

次に、日本文学界のこの問題に対する見方について考察することにする。

47) 古遠清「海峡兩岸『看張』的政治性和戲劇化現象」林幸謙編『張愛玲：文學・電影・舞台』Oxford University, Hong Kong, 2007年。p211には『中華民國文藝史』台北中正書局、1971年p893,と明記される。尹雪曼総編集『中華民國文藝史』正中書局、1975年5月、のことであろうか。

48) 前掲論文「海峡兩岸『看張』的政治性和戲劇化現象」、p211-212。

49) 前掲論文「海峡兩岸『看張』的政治性和戲劇化現象」、p212-215。

50) 水晶、本名楊沂、1935年3月生まれ。本籍江蘇省、1949年頃、中国大陸から台湾に渡る。ロサンゼルス州立大学・淡江大学教授、台湾作家。『張愛玲の小説芸術』（大地出版社、1973年初版）や『張愛玲未完』（大地出版社、1996年12月）などを著す。

51) 邵迎建「50年代以後的張愛玲及張愛玲文學的接受場」『張愛玲的傳奇文學與流言人生』秀威資訊科技出版社、2012年9月、p251。

## VI 日本の文学界の見方

## 1 「一つの中国」論の影響

日本で出版された 40 冊程度の「中国文学」と「台湾文学」を紹介する書籍（翻訳書、研究資料と論文等は含めず）を検証した結果、共通の特徴と傾向を見出すことができた。それは 1966 年から 1993 年の間に、「中国文学」を紹介した本を見つけるのは容易であるが、「台湾文学」を紹介する本を見つけるのは容易ではなかったことである。日本でも台湾でも、台湾研究がタブーであった時代があったからであろう。また、これら「中国文学」を紹介した本であっても、年表、索引、果ては内容に至るまで、いずれも張愛玲の名前を見つけ出すことはできなかった。

まず『辞典』と『事典』の状況を見てみよう。1966 年に出版された『新潮世界文学小辞典』<sup>52)</sup>、1972 年に出版された『中国文学小事典』<sup>53)</sup>と 1985 年に出版された『中国現代文学事典』<sup>54)</sup>からはいずれも張愛玲の名前を見つけることはできなかった。1990 年に出版された『増補改訂 新潮世界文学辞典』<sup>55)</sup>になってようやく張愛玲の記載が現れるようになった。1997 年 1 月に出版された『集英社 世界文学大辞典 2』<sup>56)</sup>と 2002 年に出版された『集英社 世界文学事典』<sup>57)</sup>にはいずれも彼女の名前が記載されている。

書籍においては、1994 年に出版された下村作次郎教授の『文学で読む台湾』の年表、及び 1995 年に出版された『原典で読む 図説中国 20 世紀文学—解説と資料—』の内容中に、次第に張愛玲の名前が見られるようになってくる。例えば 1994 年の『文学で読む台湾』では、年表の中にのみ、次のように記載されていた。「1952 年張愛玲香港に脱出、1954 年張愛玲『赤地之恋』『秧歌』（香港）7、1968 年張愛玲『張愛玲短編小説集』」<sup>58)</sup>このように、「反共」とみなされていた張愛玲作品、及び戒厳令下の台湾で皇冠出版社から出版された作品が、ついに初めてここで記載されるようになったのである。

特筆すべきは『原典で読む 図説中国 20 世紀文学—解説と資料—』において、年表付録がないとはいえ、「概論・1940 年代」の中では正式に張愛玲に触れ、およそ 1 ページの紙幅を割いて、『傾城之恋』の一部内容、語句の解釈と研究資料等が記載されている。この本の「まえがき」の部分には、次のように述べられている。「『20 世紀』という時期区分は、比較的客観的な歴史叙述を可能とし、これまでの既成概念を多少とも突き崩すことができたかも知れない」<sup>59)</sup>と。

1998 年に出版された『台湾文学この百年』では、年表にこのような記述がある。「1943 年張愛玲『傾城之恋』、1952 年 7 月張愛玲香港へ脱出、1954 年張愛玲『赤い恋』、1991 年 7 月『張愛玲文集』全 15 巻、

52) 伊藤整等『新潮世界文学小辞典』新潮社、1966 年 5 月、1982 年 6 月 9 刷。

53) 藤野岩友等『中国文学小事典』高文堂出版社、1972 年 4 月。

54) 丸山昇、伊藤虎丸、新村徹『中国現代文学事典』東京堂出版、1985 年 9 月。

55) 新潮社辞典編集部『増補改訂 新潮世界文学辞典』新潮社、1990 年 4 月、p642。

56) 世界文学大事典編集委員会『集英社 世界文学大事典 2』集英社、1997 年 1 月、p929。

57) 世界文学大事典編集委員会『集英社 世界文学事典』集英社、2002 年 2 月、p977-978。

58) 下村作次郎『文学で読む台湾』1994 年 1 月、田畑書店、p396-397、p405。

59) 中国文芸研究会編「まえがき」『原典で読む・図説中国 20 世紀文学—解説と資料—』白帝社、1995 年 3 月。

1995年張愛玲没<sup>60)</sup>となっている。注目に値するのは、この本は『張愛玲文集』を「台湾」の項目に記述した他、その他はいずれも「世界」の項目に記述していたことである。

この他、1997年に出版された『新しい中国文学史—近世から現代まで—』の「中華民国期 その3—共和国興亡と文学の成熟—(1937年から1948年) 陥落区の女流作家に関して」の中では、正式かつ詳細に張愛玲について論述している。また「文明論としての恋愛小説」の一節の中では「このような家、恋愛、貨幣など上海・香港に移植された西洋文明の本質を崩壊期という特殊な時代にあって抉り出したのが張愛玲文学であったといえよう」<sup>61)</sup>と述べている。この本は、社会史の観点から作家の作品を検討したものであるといわれている。

2003年に出版された『講座・台湾文学』という本では、「1980年代以降の台湾文学、外省人二世作家の活躍」の中で、朱天文に関する記述には、その父である朱西寧、胡蘭成と三三書房との関連について言及した際、張愛玲にも触れている。それは次のとおりである。「49年5月の戒厳令施行後は、魯迅を筆頭にほとんどの民国期文学は禁書となった。国民党は台湾人に日本語に代わって北京語を国語として強制したにもかかわらず、この国語を創り出した現代中国文学の父ともいべき魯迅やその同時代文学の読書を禁じたのである。その中でほとんど張愛玲のみが例外的に出版が許されており、朱天文も彼女の恋愛小説を愛読した」<sup>62)</sup>、このように当時の台湾における文学環境と、政治的な圧力の下で、張愛玲の作品のみが例外的に出版を許可された記述が公開されている。

2005年に発行された『20世紀の中国文学』では、「陥落区の女性たち—張愛玲と梅娘—」の一節に、張愛玲の名前が現れるだけでなく、張愛玲に関する数々の事柄も数ページにわたって詳細に記述している。戦後の上海や香港の文学史、台湾文学史及び現代中国の美しい女流作家の影響について、大いに関心を寄せ、これらの事柄について詳細に記述している。また、この本の年表では、中国と世界に分ける中で、張愛玲を中国に入れている<sup>63)</sup>。

1996年の『台湾文学 異端の系譜』<sup>64)</sup>及び2006年の『台湾文学のおもしろさ』<sup>65)</sup>の2冊の本には、いずれも張愛玲の記述がない。1998年の『中国文学史』（修訂版）<sup>66)</sup>には、「三毛」「瓊瑤」「金庸」の名前があるにもかかわらず、張愛玲の名前のみが欠けている。

2003年に出版された『中国20世紀文学を学ぶ人のために』では、「日本占領下の文学状況—上海—」の中で、小説『傾城之恋』に言及した時、「張愛玲の意図とは、男女間の恋や機微に材をとる当時の文学状況の趨勢に乗りながらも、それだけにはとどまらず、男女のあり方に当時の社会状況の構図を組み込み、上海の姿を問い続けようとした」<sup>67)</sup>と指摘される。

60) 藤井省三『台湾文学この百年』、東方書店、1998年5月、年表。

61) 藤井省三、大木康『新しい中国文学史—近世から現代まで—』ミネルヴァ書房、1997年7月、p183。

62) 前掲書『講座 台湾文学』、p220。

63) 藤井省三『20世紀の中国文学』放送大学教育振興会、2005年3月、p253、p254、p260。

64) 岡崎郁子『台湾文学—異端の系譜—』田畑書店、1996年4月。

65) 松永正義『台湾文学のおもしろさ』研文出版、2006年6月。

66) 前野直彬編『中国文学史』東京大学出版会、1975年6月初版、1998年修訂版。

67) 梁有紀「日本占領下の文学状況—上海—」宇野木洋、松浦恆雄編『中国二〇世紀文学を学ぶ人のために』世界思想社、

## 2 「中・台文学史」を同列に論じる

2004年に出版された『中国現代文学の系譜—革命と通俗をめぐる—』の中で、「“救国”と“通俗”の相克—20世紀前半の小説—」の一節に、張愛玲について次のような記述がある。「彼女の作品には、不調和な色彩感覚や、近代から伝統的大家族への回帰など、共通する“不調和と不安感”が見られるが、崩壊寸前の近代都市上海にあって、東西文化の衝突を正面から描ききった<sup>68)</sup>と書く。

この他、1999年版の『岩波現代中国事典』<sup>69)</sup>及び2004年版の『中国女性の100年—史料にみる歩み—』<sup>70)</sup>の2冊の本は、文学の範疇に属さない書籍であるが、いずれも張愛玲に関する詳細な記述がある。このことからわかるように、この時期には張愛玲はすでに有名作家と見なされているだけでなく、翻訳家とも見なされ、同時にフェミニストとしても大いに重視されているのである。

要するに、1994年以前はずっと無視されてきた張愛玲が、この年から転換期に入ったということである。まず「台湾文学」の年表に、次いで「中国文学」の内容に、2005年は「中国文学」の年表にと、次第に張愛玲に関する記述が現れるようになってきた。この他、張愛玲に関する記述は年々増加しているだけでなく、同じ本の中に何度も重複して記述される傾向もある。こうして見ると、日本の研究者によって「中国文学史」に入れても、問題がないばかりか、更には日中両国が国交回復した際、共同声明で中国政府は、台湾が中国の領土の不可分の一部であることを表明したため、張愛玲は「台湾文学史」に書き入れられる可能性もある。中国文学を研究する日本人にとって、中国大陸と台湾はひとつと見なされ、「中国文学史」と「台湾文学史」の区別はあまり意味のないことであるからであろうか、両者を同列に論じ、同一の分野と見なしていた。

近年になって、すでに一部の日本の研究者には、台湾海峡兩岸の過去の歴史的な因縁を理解し、「中・台文学史」を明確に区分し、別々に扱っているものも見られる。唯一問題なのは、張愛玲がかつて漢奸と批判され、同時に彼女の作品も一度は「通俗文学」と指弾されたことから、今日に至っても、依然として日本で出版された一部の中国文学書では、いまだに彼女の存在は無視され続けていることである。

## 3 日本での張愛玲研究

### (1) 映像品と書籍（翻訳を含む）

日本で、日本語で出版されている張愛玲の映像品と書籍（翻訳を含む）は次の表のとおりである。

---

2003年6月, p244-245.

68) 阪口直樹『中国現代文学の系譜—革命と通俗をめぐる—』東方書店, 2004年2月, p63.

69) 天兒慧等編『岩波 現代中国事典』岩波書店, 1999年5月, p859.

70) 邵迎建「コラム 張愛玲『傾城の恋』(1943年)」中国女性史研究会編『中国女性の100年—史料にみる歩み—』青木書店, 2004年3月, p178.

張愛玲と台湾文学史（鈴木）

著者	書名タイトル	出版社	出版年など
VHS	傾城の恋（字幕付き）	ポニーキャニオン	1993年4月
DVD	傾城の恋（字幕付き）	キングレコード	2004年4月 1992年日本公開
VHS	赤い薔薇白い薔薇（字幕付き）	エスピーオー	1996年7月
DVD	フラワーズ・オブ・シャンハイ（字幕付き）	松竹	1998年公開 2005年
DVD	傾城の恋 上海ロマンス BOX 1 （字幕付き）	ビクターエンターテイメント	2008年中国 2010年7月日本
DVD	傾城の恋 上海ロマンス BOX 2 （字幕付き）	ビクターエンターテイメント	2008年中国 2010年8月日本
DVD	ラストコーション（字幕付き）	ビクターエンターテイメント	2008年9月
訳 柏謙作	『赤い恋』	生活社	1955年10月
訳 並河亮	『農民音楽隊』	時事通信社	1956年4月
訳 池上貞子	『傾城の恋』『金鎖記』, 「留情」	平凡社	1995年3月
藤井省三 編集監修 訳 清水賢一郎 上田志津子	発見と冒険の中国文学5『浪漫都市物語—上海・ 香港 40s』 「封鎖」, 「戦場の恋—香港にて」, 「香港—焼け跡の 街」, 「囁き」, 「やっぱり上海人」	JICC 出版局	1991年12月
藤井省三編 訳 藤井省三	『笑いの共和国：中国ユーモア文学傑作選』 「外国人が京劇およびその他を観ると」	白水社	1992年6月
今福竜太編 訳 垂水千恵	『世界文学のフロンティア〈4〉ノスタルジア』 「赤薔薇、白薔薇」	岩波書店	1996年11月
丸山昇監修 訳 伊禮智香子	『中国現代文学珠玉選小説2』 「若い時」	二玄社	2000年3月
丸山昇監修 訳 丸尾常樹	『中国現代文学珠玉選小説3』 「心経」	二玄社	2001年3月
邵迎建	『伝奇文学と流言人生—1940年代上海・張愛玲の 文学』	お茶の水書房	2002年10月
訳 方蘭	『半生縁—上海の恋』	勉誠出版	2004年10月
訳 南雲智	『ラスト、コーション 色・戒』 「色・戒」「愛ゆえに」「浮き草」「お久しぶり」	集英社	2007年12月
池澤夏樹編 訳 垂水千恵	『世界文学全集』3-05「色、戒」	河出書房新社	2010年7月
池上貞子	『張愛玲—愛と生と文学』	東方書店	2011年3月
訳 岡部泰枝, 重澤倫子, 鎌田 純子等	「翻訳 張愛玲『流言』より翻訳：『子どもの言葉 にタブー無し』『わたしの文章』『千里山文学論集』 65	関西大学	2001年3月
訳 徐青	「鬱金香」『愛知大学国際問題研究所紀要』134	愛知大学国際問題研究所	2009年9月
訳 徐青	「鴻鸞禧」『文明21』26	愛知大学国際コミュニケー ション学会	2011年3月
訳 徐青	翻訳 中国人の宗教（含 解題）『愛知大学国際問 題研究所紀要』137	愛知大学国際問題研究所	2011年3月

訳 蟹江静夫等	「張愛玲『談跳舞』』『言語文化論集』33	名古屋大学大学院国際言語文化研究科	2012年2月
訳 徐青	「翻訳 女性について語る」『文明21』28	愛知大学国際コミュニケーション学会	2012年3月
訳 李海等	「張愛玲 女を語る [談女人]」『言語文化論集』35	名古屋大学大学院国際言語文化研究科	2013年10月
訳 蟹江静夫	「翻訳 張愛玲『現代中国語に対する若干の小さな意見』」『名古屋大学外国語学部紀要』46	名古屋外国語大学	2014年2月
訳 徐青	「絵を語る 談画」『文明21』33	愛知大学国際コミュニケーション学会	2014年12月
訳 徐青	「瑠璃瓦」『文明21』35	愛知大学国際コミュニケーション学会	2015年12月
訳 徐青	「更衣記」『文明21』36	愛知大学国際コミュニケーション学会	2016年3月
訳 星野幸代等	「共訳 張愛玲『第一炉香』その1」『言語文化論集』38	名古屋大学大学院国際言語文化研究科	2016年9月

表1：張愛玲関連日本語字幕付映像作品と日本語書籍など

日本で映像作品として売られているものは、代表作の「傾城の恋」とセンセーショナルな「赤い薔薇 白い薔薇」である。つまり、視聴者の興味や関心を引く、営業ベースで受け入れられそうなものを厳選した印象を受ける。一方、書籍（翻訳）は、中国大陸で執筆した代表作数点、それに散文、香港で議論を呼んだ2冊の作品、及び研究書2冊である。映像化されたものには当然、翻訳が出ている。他に大学の研究紀要に散文と小説の翻訳が12本掲載されている。

日本大学の図書館で「張愛玲」の語彙で論文検索を行ったところ、magazineplus マガジンプラスで、97件、CiNii サイニで100件の結果を得た<sup>71)</sup>。

氏名	タイトル	西暦年月	大学
1 邵迎建	不確定なアイデンティティ：張愛玲の文学	1995年3月	東京大学
2 張欣	梅娘と中国「淪陷区」文学	1999年11月	東京大学
3 顧蕾	張愛玲と林芙美子の比較研究：作品における母娘関係	2005年9月	名古屋大学
4 鎌田純子	張愛玲と思想：50年代を中心に	2007年9月	関西大学
5 河尻和也	張愛玲の文明観の＜変容＞についての考察：外国人作家の作品との関係を中心として	2008年3月	名古屋大学
6 河本美紀	張愛玲と映画	2008年3月	大阪大学
7 王勝群	田村俊子と張愛玲の比較文学的研究：女性作家がく見せる＞こと	2015年3月	名古屋大学

表2：日本での張愛玲研究での学位受領者<sup>72)</sup>

日本には7名の張愛玲研究での学位受領者がいる。

71) 2016年3月17日(水曜日)現在のデータである。

72) CiNii Dissertation 検索—張愛玲, <http://ci.nii.ac.jp/d/search?advanced----->, 2016年4月7日データ取得。

## (2) 2007年以後の日本の文学界の張愛玲

吉田富夫『中国現代文学史 1915-49』<sup>73)</sup>では、Ⅲ抗日戦争—内戦期の文学(1)「<孤島>文学」の中で、「上海に異様な人気を集めた女流作家」「都会の倦怠感の立ちのぼるその世界は、日本軍占領下で出口のない生活を送る上海の読者の心をとらえた。しかし、抗日戦争が終わると、張愛玲には『文化漢奸』のレッテルが貼られ、人民共和国成立後の大陸ではまったく忘れ去られた。ただ、香港や台湾では根強い人気を持ちつづけ、80年代になって再評価されつつあるが、95年にアメリカで孤独のうちに死んだ」<sup>74)</sup>と紹介される。

一方、洪子誠教授は、1999年に北京大学出版社の文学史を大幅修訂したものを岩佐昌暉教授他が翻訳した『中国当代文学史』<sup>75)</sup>には9か所で張愛玲の名があるが、いずれも名前か数行程度の説明にとどまっている。「張愛玲は1952年に中国大陆を離れて香港に行き、その後アメリカに移住した」<sup>76)</sup>「上海の旧時代の物語が再発見され語られ、また同時にかつて上海を語った張愛玲も発見される。退廃と衰敗、繁華の後の物淋しさ—それがまた多くの人々を魅了する美的経験となりはじめていたのである」<sup>77)</sup>「張愛玲ブーム」<sup>78)</sup>などがそれである。

『作家名から引ける世界文学全集案内 第Ⅱ期』<sup>79)</sup>では、張愛玲の翻訳リストを掲載している。

『最新海外作家事典 新訂第4版』<sup>80)</sup>では27行にわたり説明したあと、最近の邦訳を案内している。

他に鄭万鵬『中国当代文学史——建国より20世紀末までの作家と作品』<sup>81)</sup>を中山時子教授、伊藤敬一教授、藤井栄三郎教授、李玉敬準教授などが翻訳したものが2002年11月に出版されている。第1章「建国文学」で『秧歌』のみが取り上げられ「張愛玲は1947年の田舎での体験と海外で耳にした噂をもとにして1952年の大陸の生活を小説に編み上げたために、歴史の真実に背いてしまったのである。これは、技術上の誤りではなくて、マッカーシー主義（一略—）の支配するアメリカの『報道』機構が『権限を授けた』『けしかけた]結果であった」と、左翼思想の立場から強く厳しい評価をしている。

藤井省三教授は、日本の戦後には張愛玲の受け入れに2回のブームがあった、という。ひとつは1950年代中期の香港に亡命した時に書きたいわゆる2冊の反共小説の翻訳、その後1960年代と1970年代には抹殺されており、次は1980年代末から1990年代までは、池上貞子教授の紹介と、藤井の翻訳、1990年代の邵迎建の研究がある、と述べる<sup>82)</sup>。

73) 吉田富夫『中国現代文学史 1915-49』朋友書店、2007年4月、p194-195。

74) 前掲書『中国現代文学史 1915-49』、p195。

75) 洪子誠著『中国当代文学史』修訂版、北京大学出版社、2007年、岩佐昌暉、問ふさ子他訳『中国当代文学史』東方書店、2013年12月、p194-195。

76) 前掲書『中国当代文学史』、p119。

77) 前掲書『中国当代文学史』、p514。

78) 前掲書『中国当代文学史』、p542。

79) 『作家名から引ける世界文学全集案内 第Ⅱ期』日外アソシエーツ（株）、2004年2月、p271。

80) 日外アソシエーツ編集『最新海外作家事典 新訂第4版』日外アソシエーツ（株）、2009年7月、p411。

81) 鄭万鵬著、中山時子、伊藤敬一、藤井栄三郎、李玉敬 翻訳監修『中国当代文学史——建国より20世紀末までの作家と作品』白帝社、2002年11月、p28-29。

82) 藤井省三「张爱玲文学在日本」刘绍铭・梁秉钧・许子东編『再读张爱玲』山东画报出版社、2004年5月、p212-213。

このように日本で翻訳したものは、時間差があるとはいえ、常に大陸の政治的影響を強く受けたものであり、吉田富夫教授の文学史のように、張愛玲を正当かつ冷静に取り扱う文学史が多く現れる時代がくるのを願う。

2014年出版の『台湾近現代文学史』では、年表に「1968年張愛玲短編小説集」が記載され、「反共文学」として『秧歌』を1頁以上紹介している<sup>83)</sup>。日本人の編集した「台湾文学史」の中に「反共」とはいえ、堂々と張愛玲を入れたことは高く評価できよう。

### (3) 「台湾文学」、「中国文学」と「世界漢語文学」

次に検討しなければならないのは、「台湾文学」、「中国文学」と「世界漢語文学」という三者の関係の問題である。「台湾文学」は「中国文学」に含むべきなのか、それとも「台湾文学」と「中国文学」は根本的に相容れず、それぞれ独立した異なる分野であるのか、もしそうであるならば、「漢語文学」とはどのような連帯関係にあるのであろうか。それに「中国文学」以外の分野はすべて「漢語文学」と称してよいのだろうか。日本で張愛玲の文学史における位置付けの問題を研究する時に、まず解決しなければならないのは、「台湾文学」、「中国文学」及び「世界漢語文学」の三者をどのように区分し、線引きをするかという問題であろう。なぜなら、日本の研究者は日中両国が1972年に国交回復したので、その影響で文学問題を考慮する可能性があるため、現在に至っても、この問題について明確な区分がされておらず、統一した見解もない。だが、そもそも、三者のどれが正しいのかというように、三者の明確な定義付けを求める前提があることに異議を持つという考えもあろう<sup>84)</sup>。一方、「台湾文学」に関する書籍は、1994年に出版された『文学で読む台湾』及び1998年に出版された『台湾文学この百年』のように、いずれも年表にしか張愛玲の記載がなく、内容ではまったく触れていない。前者は台湾文学の研究者、後者は中国文学の研究者による著作である。1997年に発行された『新しい中国文学史—近世から現代まで—』と2005年に発行された『20世紀の中国文学』の2冊には、年表の中だけでなく、張愛玲を含むすべての台湾作家の名前が「中国」の項目に書かれており、「世界」の項目に書かれていない。つまり、書名が「中国文学」の時は、張愛玲は「中国」の項目に書かれるが、書名が「台湾文学」である場合、張愛玲は「世界」の項目に書かれるのである。こうしたことから、藤井省三は張愛玲を主に「中国文学」の中に書き、「台湾文学」の中の張愛玲に至っては「辺境」の位置に列している。「中国文学」と「台湾文学」を研究している日本の研究者は、今でもなお明確な区分がないようで、藤井省三のように、張愛玲を「中国文学」の中に位置付け、「香港文学史」と「台湾文学史」の中のみ、簡単に張愛玲について触れている。中国文学研究の日本の権威学者は、『20世紀の中国文学』とは、相互に越境しあう中国・香港・台湾そして日本との現代文化交流の物語なのです』今後『中国語圏文学』のアン

<sup>83)</sup> 中島利郎、河原功、下村作次郎編『台湾近現代文学史』研文出版、2014年5月初版、p234-236、p491。

<sup>84)</sup> 「〇〇文学」とは何かを考えると、「中国文学」「日本文学」「英文学」など国の名前を冠した文学があるが、近年、民族、母語、国籍、執筆言語、執筆地などの境界線が明確でなくなり、自明の前提が揺らいでいる。

ソロジー編集を進めている」<sup>85)</sup>と述べ、「中国語圏文学」というジャンルを提起している。2011年10月ついに『中国語圏文学史』を出版し、映画コラムでも言及する<sup>86)</sup>。

また、日本で出版された『集英社 世界文学事典』の中では、台湾作家の名前はいずれも「中国、台湾作家」のカテゴリーに列せられている。日本人は「台湾」と「中国」の区分について、その認識の上ではまだ充分明確になっていないようである。台湾内部の見解でも日本のそれと同様に、依然として共通した認識には達していないようである。日本の学会は、一般的に「台湾文学」の研究では、研究領域を「台湾」本土の範囲内に限り、中国大陸と香港とは完全に分け、独立した範疇として研究している。しかし、「中国文学」の研究では少々異なり、台湾を含めるかどうかは研究者によって異なっている。つまり、ある者は「台湾」と「中国」を同一の対象として研究し、ある者は「中国」だけをその対象としているのである。これは、研究者個人の思想背景によって決定されるのであろう。

『境外の文化—環太平洋圏の華人文学—』の編者である山田敬三教授は、かつてその本の序章で次のように強調している。「現在の台湾は中国の政治的実効支配が及ばない地域であり、そこを『国内』に包括して、台湾の文学をも『中国文学』に含めようとする陳賢茂氏の見解には、あきらかに無理がある」<sup>87)</sup>。山田敬三は、「台湾文学」を「中国文学」の外に独立させた研究者である。2002年に上海で開かれた第12回世界華文学国際会議の席で、彼は一度不愉快な経験をしたことがある。それは、彼が会議前に提出した論文が印刷を拒否され、その理由が「敏感（政治的にデリケート）な叙述があったため」<sup>88)</sup>というものであった。

山田敬三は、「現在、なお中華文化の発揚を課題とする研究に傾きがちな中国の華文学研究や、アイデンティティ確認に比重をおきがちな在米華人による華人文化研究とは異なる、より客観性を重視した華文学の研究が必要になっていると私自身は考えている」<sup>89)</sup>と指摘している。

彼は、世界各地に散らばっている華人作家はたいへん多く、そのため「世界華文学」の立場に立つて問題を考慮する必要があると提案している。米国カリフォルニア大学の杜国清教授は、次のように指摘する。「『華文学』ないしは『世界華文学』という概念の成立は、世界中の華文作家達は国籍を乗り越え、その類似する文化意識及び歴史的な共感意識に基き、華語または漢語を共同の創作媒体とすることによって結び合っている世界的な文学現象だ、と言わなければならないと思います」<sup>90)</sup>と述べる。

85) 藤井省三「まえがき」『20世紀の中国文学』放送大学教育振興会、2005年3月、p5-6。

86) 藤井省三『中国語圏文学史』東京大学出版会、2011年10月、p9-10。

87) 山田敬三編「序—境外の文化」『境外の文化—環太平洋圏の華人文学—』汲古書院、2004年12月、p8。

88) 前掲「序—境外の文化」、p9-10。

89) 前掲「序—境外の文化」、p12。

90) 杜国清「中国と世界華文学」『未名』15号、中文研究会、1997年3月、p142。

## Ⅶ 切っても切れない言語、文字と血縁関係

### 1 漢語の優越性

張愛玲作品が順調に台湾に上陸し、また急速に多くの文学愛好者の共感を得ることができたその主な理由は、当時の国際情勢による以外に、文字言語の共通性が発揮する特殊な機能も見逃せない重要な要素であろう。台湾全島には、多くの言語が自由自在に通じる。

台湾では学校で正式に「国語 = (標準中国語)」を教える以外に、「台湾語」(閩南語、福佬語)の授業もある。この他にも、「客家語」、「日本語」、「原住民語」等が、何の問題も無く通用することがある。台湾の島に、多くの言語が並存し共生していることは、この島に住み着く人々が、「世界各地」からやってきた人々であり、「悲喜こもごもの出会いと分かれ」を何度も経て、台湾の言語が形成されてきたことを意味する。つまり台湾は、多くのエスニックグループによって構成された社会である。

標準中国語による「国語」教育は、第二次世界大戦が終結し、中華民国政府の台湾統治以降に初めて実施された教育である。これ以前、日本統治下の台湾で 50 年近く公認されていた「国語」であった言語は、「日本語」である。ものを読み書きする「日本語」は教育を受けた人々に深くしみ込んでいた。当時の台湾人は学校で「日本語」を学習し、街でその使用を強制されていたとはいえ、日本統治下におけるほとんどの台湾人は、自らの日常生活における母語である「閩南語」や「客家語」あるいは「原住民語」を忘れることはなかった。そして、国共内戦で、国民党が台湾に逃れ、中国大陸の人々が蒋介石政権に伴って台湾に移り住んで来てからは、それ以前からこの島に住んでいた台湾人も、「公用語」になった「国語 (= 標準中国語)」を学ばなければならなくなった。「国語」が今までの「日本語」から標準中国語に変わったのである。そのため、それまで「日本語」で作品を発表していた本省人作家は、当然、標準中国語でしか作品を発表できなくなったのである。これは台湾本土の作家にとって、非常に厄介なことであった。

台湾では戦後、日本統治時代に構築した教育制度を引き継いだため、国民政府が台湾で推進した「国語 (= 標準中国語)」教育は学校を土台にして急速に展開した。標準中国語を強制した国民党は罰則を付けて、公の場で「日本語」を禁止させたので、比較的短期間のうちに「国語」を速やかに普及させることができた。そして「標準中国語」は「日本語」に取って代わり、人々の意思疎通の主要な手段の「国語」となったのである。「国語」の普及にはメリットがあった。それは、人々がそれぞれの方言なまりの「国語」を話したり、或いは純正な方言を話しても、相手の言葉が複雑で聞き難くて理解できなくても、漢字を書きさえすれば、言葉上の問題が、かなり解決する。これは「漢字文化圏」が強い連帯関係を持ち、「血は水よりも濃い」という強烈的な団結力を持つ主な原因のひとつである。張愛玲の作品が台湾で急速に根を下ろし、多くの読者に愛読される作品となった事実は、漢字が発揮する機能が、無視できるものではないことを裏付けている。

上海出身の張愛玲は、一部の作品を英語で書いたとはいえ、彼女の大部分の著名な作品は、いずれも

母語である「漢語」で書かれている。すなわち、彼女は漢字で文章を発表していた時に、彼女の作品は絶対多数の「漢字文化圏」の読者の人気を集めることができた。また、張愛玲作品は「書き言葉と話し言葉が半々（原文は『半文半白』）」の文体で書かれているため、これは「国語（＝標準中国語）」をあるレベルまで学び、もう一段レベルアップさせて、古典を觀賞できるようになりたいと考える読者にも役に立つ。それゆえ、彼女の作品は素早く台湾に深く浸透することができた。張愛玲の「書き言葉と話し言葉が半々」の文体からは、中国古典文学の香りが感じられるだけでなく、旧社会の慣用語の妙を深く感じることができる。これは中国大陸から台湾に撤退して来た外省人にとって、郷愁を呼び覚ますことになり、作品はその魅力を発揮することができた。彼女が子供の頃、父親の書齋にこもって読破した古典の名著が、このような結果をもたらすとは、張愛玲もきっと予想していなかったであろう。

張愛玲の「書き言葉と話し言葉が半々」という執筆テクニックは、「自由に『伝統』と『近代』、『雅』と『俗』の間を行きつ戻りつ、2つの均衡と疎通の域に達した」<sup>91)</sup>、一つに融合した気品溢れる漢語の融合例であろう。これは「本省人」であろうと「外省人」であろうと、「共に享受」できる言語のオアシスの場を提供したことになろう。もし当時の台湾で「国語（＝標準中国語）」教育がまだこのレベルにまで達してなく、中国大陸から台湾にやって来た外省人の故郷を想う気持ちがそれほど強烈でなかったら、彼女の作品が順風満帆に台湾文学市場に進出できたかどうかは、疑問である。現代の「書き言葉と話し言葉が半々」の恋愛小説を読むことに飢えていた、当時の台湾の文学愛好者の気持ちは十分に理解できる。

何よりも、当時の国民党政府が左派作品を中国大陸から台湾へ輸入する事を厳禁していたため、張愛玲に台湾の文学市場を独占させる良い機会を提供したのである。ともあれ、張愛玲文学が台湾や香港、世界の中華街の華僑と華人たち、つまり「漢字文化圏」の読者を獲得できたその主な原因は、当時の国際情勢と台湾の置かれた特殊な環境以外に、漢字自体の持つ優越性、及び伝統的な「大中華」文化が発揮した機能も見逃すことができない。我々が、張愛玲が台湾文学に与えた影響を考察する際、言語、文字、血縁の発揮する特殊な効果も、考慮を要する一つの要素とすべきであろう。

## 2 エスニックグループの思考を超越すること

台湾が現在直面している「本省人」と「外省人」との間の矛盾する問題は、歴史的な因縁がもたらした結果である。近年、「台湾意識」の高まりに伴い、この島に暮らすおよそ70%近い人が、自分は「台湾人」であり<sup>92)</sup>、「中国人」ではないと考えている<sup>93)</sup>。「2016年3月の台湾世論調査では『自分は台湾人』

<sup>91)</sup> 錢理群、吳曉東著『彩色図版中国文学史』北京和平出版社の中の「新世紀の文学」の部分。趙京華、桑島由美子、葛谷登記『新世紀の中国文学—モダンからポストモダンへ—』、白帝社、2003年7月、p68。

<sup>92)</sup> 「現在では70%近くが『台湾人だ』と答えます」。彭明敏・中嶋嶺雄 対談「『中華世界』からの離脱という世界史の実験は成功するか」『中央公論』中央公論新社、2005年11月号、p166。

<sup>93)</sup> 「政治大学が6月に実施した世論調査によると、『自分は台湾人』と答えた人が59.0%で、『中国人』はわずか3.3%だった」。大月克巳「高まる台湾アイデンティティー警戒する中国—来年1月に総統選」特派員リレー報告(45)『メディア展望』NO.645、2015年9月1日、p23。

と考える人がこの20年間で最高の73%に上った」<sup>94)</sup>、また、中高生の9割が「自分は台湾人」と考えているという<sup>95)</sup>。しかし、たとえ「台湾意識」を強調するとはいえ、張愛玲の台湾文学に与えた絶大な影響は否定できるものではない。文学は文学であり、それは当時の客観的社会の一面を反映する鏡であり、政治とは必ず一定の距離を保ち、当時の歴史の経過と事実を認めるべきである。ある人は、張愛玲はその2冊の「問題作」が「反共」作品と「誤解」されたことによって、その作品が台湾市場に進出する機会を得たのだと言っているが、このような言い方にも一理があろう。しかし、一時的な政治的要素が原因で、台湾の文学市場を獲得したとしても、それは長続きできない。なぜなら、政治環境は目まぐるしく移り変わり、常に突発的な事態が起きる可能性があるからである。作品の文化的な背景、執筆のテクニク、文字運用の優越性こそが、読者の注目を集める決定的要素となろう。「天の時」の重要性はもちろん否定できないが、張愛玲作品が持つ独特の魅力こそが、台湾で根を下ろし、花を咲かせた主な原動力なのである。

戦後60余年以上が経ち、本省人であろうと外省人であろうと、台湾にきた時期に前後があろうと、その根を辿ると同じルーツ、同じ文化を持つ漢民族である。問題の根本的原因は戦後のある一時期における不幸な政治的因縁によって引き起こされたものである。そうでなければ、文学界の論争も今日まで尾を引くことはないであろう。現在の状況下で、本省人作家が外省人作家と中国大陸の文学をあまり認めたくないのは、理解できよう。しかし、本省人は張愛玲がれっきとした中国の上海人で、その体に「中華」の香りが満ち溢れている作家であることを否定することはしない。もちろん、彼女は生まれも育ちも台湾の人間ではない。これは誰もが知っていることである。「台湾」と「中国」、「台湾文化」と「中国文化」を一刀両断にできるか否か、これは複雑で困難な問題である。この問題は、台湾海峡兩岸の政治、経済、社会と文化等の深層にまで影響が及ぶため、今日に至るまで合理的な解決方法を見つけ出すのは困難である。海峡兩岸の文学史に関する論争は、理性と感情の衝突も激しく、当事者のみが理解できるものであろうか。「なぜなら、いわゆる中華文学史は統合を熱望するが、台湾文学史は分離にあこがれているからである。しかし、元をただせば両者は単にコインの表と裏に過ぎないのである」、「台湾ナショナリスト（国族主義）の人は、張愛玲を台湾新文学史に含めることはあまり望まないが、彼らも張愛玲に代表される中華文明のアイデンティティを放棄することもあまり望んでいない」<sup>96)</sup>。兩岸の人々の複雑な心境は、十分に人を同情させるものがある。

94) 翻訳・編集／柳川（2016年3月15日）「『自分は台湾人』20年間で最高の73%に、『中国人』は22%—台湾世論調査」Record china, 19時40分配信。http://sp.recordchina.co.jp/newsinfo.php?id=131093&ph=0

95) 陳至中（2015年3月21日）「中高生の9割が『自分は台湾人』＝社団法人調査」『中央フォーカス台湾』兩岸・社会、18時18分配信。http://japan.cna.com.tw/search/201503210005.aspx?q=%E8%87%AA%E5%88%86%E3%81%AF%E5%8F%B0%E6%B9%BE%E4%BA%BA

96) 任佑卿「國族的界限和文學史：論建構台灣新文學史與張愛玲研究」『文化研究』第2期、遠流出版、2006年3月、p277-278.

### 3 「台湾文学史」の「辺境」としての張愛玲

張愛玲を「台湾文学史」に書き入れるのにこれほど多くの困難があるのなら、この際融通を利かせ、彼女を暫定的に「台湾文学史」の「辺境」に書き入れることは可能であろう。理由は次の通りである。1. 彼女と台湾は、多少なりとも直接的な関係がある。台湾に一度行ったことがあり、台湾に関する散文を一本書いたことがある。2. 中国大陸と台湾は、言語、文字、血縁において切っても切れない関係にある。3. 台湾の「張ファン」が、今なお多く存在している。1961年から現在まで、彼女の作品は台湾ですつと強靱な生命力を保ってきており、彼女の影響を受けた作家も少なくない。彼女は1995年に亡くなったが、彼女の作品、伝記、映画、DVD（『金鎖記』『傾城之恋』『紅玫瑰與白玫瑰』『滾滾紅塵』『她從海上來—張愛玲傳奇—』『半生緣』）等は、今でもよく売れていると言う。4. 当時の時代背景と政治環境が、彼女の作品の台湾進出を認めている。とりわけ彼女の作品には政治的意図は見受けられないばかりか、逆に、濃厚な中華文化が感じられる。そのため今日に至っても一般読者の熱烈な人気を集めている。こう見ると、張愛玲を正々堂々と「台湾文学史」に書き入れることはできなくとも、せめて「台湾文学史」の「辺境」に彼女を受け入れるある程度の「余地」があるはずである。

留学生の身分ではなく、難民法令の亡命によって渡米した張愛玲の文学を「米国家人文学」と呼べるのかということも、検討すべきであろう。

日本人の学者の山田敬三は「世界華人民学」の問題についても、独特の見解を持っている。「海外華人民学」の範囲に台湾、香港、マカオを含めるかどうかについて、彼は著書『境外の文化』の中で、次のように指摘している。

山田敬三は、「参加者の多くは『海外華人民学』を『世界文学』の中に独立させて位置づけ『国際華人民学』という項目を設定の項目を設立すべきであって、それを中国文学の支流とみなすべきではないと主張した」。彼はこう考える。「もともと『華人民学』という概念は中国語で表記されている限り、作家の居住地や国籍を問わないことになっている」。彼は「『華人民学』という概念には、どうしても『移民文学』というニュアンスが付きまとうからである。いいかえれば、『華人民学』と『中国文学』は対立する概念であって、その上に『世界』の二字を冠せるだけで、両者を包含する文学領域が成立するわけではない。—（略）—『世界華人民学』は、中国大陸の文学を含まない『世界』の華人民学である」<sup>97)</sup>と述べている。

もし山田敬三の分類に従うならば、張愛玲は「中国文学史」に書き入れることができるだけでなく、彼女の後半生は米国で執筆生活を送っていたことから、「世界華人民学史」に書き入れるのに十分な資格がある。そして「台湾文学史」に書き入れられるかの問題に至っては、明確な制限や条件がある以上、しばらくは融通の利く方法を用い、張愛玲を暫定的に、「台湾文学史」の「辺境」に書き入れてもらうしかない。では、いつになったら彼女の位置付けが正式に確定されるかについては、海峡兩岸の政治問題が徹底的かつ円満に解決されれば、この問題は直ちに解決できるものと、筆者は以前考えていた。

<sup>97)</sup> 前掲「序—境外の文化」、p2-3.

2008年以降、急速に世界がグローバル化するに従い、「中国文学」「台湾文学」「華文文学」「華語文学」など、それぞれの定義を明確化して、厳密さを求めるのは、必ずしもみのあることではない、という貴重な意見もあることも知り、啓発を受けるが、ますます混迷を深めている。

#### 4 「世界漢語文学史」創設の可能性

中国または台湾で作家の文学史における位置付けの問題を論ずる時、まず解決しなければならないのは、政治と文学との関係という問題である。このような状況は、中国では重大な問題である。実は、中国特有の政治と文学との関わり合いは、伝統的な弊害であり、21世紀の今日ではもはや通用しえないかもしれない。この他、出身地、国籍または居住地によって作家を位置付ける方法も、すでに時代の要求に合わなくなっているようだ。「地球村（グローバルコミュニティ）」の形成はすでに、国境や国籍の垣根を打ち破っている現状がある。

インターネットが発達した新しい情報化社会に生きる人々は、一生同じ国や地域に住むとは限らず、自分が不自由と感じる場所に住んでいたいとは思わなくなっている。「地球村」の人々は、もはや皮膚の色、民族、言語、習俗の違いを気にせず、安心して人権が尊重される平和な場所に住むことを求めるであろう。このため、ある有名な作家が、どこかの国に生まれて、その後、他国の国籍を取得し、あるいは二重国籍のまま、一生の内に何度も住む国を移動するといった状況が起きる可能性もあろう。このような状況でまだ、出生地、国籍、居住地によって文学史における位置付けを判断することになると、それは時代の流れに合わないのではなかろうか。筆者はこの機会を借り、一つの仮設を提示し、先学達の批評と指摘を仰ぎたいと思う。

不朽の文学作品は才能を持つ作家が、自分の<sup>なまじ</sup>馴染んだ言語や文字を巧みに運用し表現した知恵の結晶である。言い換えれば、優秀な文学作品は、人を感動させる文化背景を有し、同時に文字の巧みな運用があってこそ、誕生し得る。特に漢字は「表意文字」であるので、文字の作品内容に与える影響が大きい。「漢字」は、中国人が世界文化を豊かにした傑作のひとつではあるが、「地球村」が急速に形成される中で、「漢字」はすでに中国人だけの専売特許ではなくなっている。そこで、政治が文学に関与することを排除し、政治と全く関係のない「世界漢語文学」の領域を別個に打ち立てることが望ましいと思う。「漢語」で書かれた不朽の傑作をすべて、この分野に組み入れることができるからである。作者がどこで生まれようと、どの国のパスポートを所持しようと、現住所がどこであろうと、「漢語」を使って書いた作品が「漢字文化圏」のすべての読者にも感動を与えることができ、または「漢語」を理解できるほかの国籍の人の共鳴を得ることができれば、その作家の名前は「世界漢語文学史」に刻まれることができるようになるのである。

また、中国経済の急速な発展と、門戸が次第に開放されるのに伴って、中国人が誇りとする「神州大地」が、将来世界各地からやって来る人々の生活や仕事の楽園となるのかもしれない。その時、外国の国籍を有し、肌の色が違う人々が生んだ二世、もしくは三世が、中国で中華文化、文字、文学の薫陶を受ければ、将来彼らの中から第二の張愛玲が現れる可能性も大いにあろう。過去に漢語作家について議

論する時、往々にして焦点が「華僑」、「華人」あるいは「中華系の子孫」に集中し、華人の血統を持つ人だけが血の通った漢語作品を書けると考えられてきた。中国や台湾に生まれ、そこに長期間住み、幼い頃から中国文化の薫陶を受けてきた外国人には、絶対に人を感動させる漢語文学作品を書くことはできないと断言できるのであろうか。逆の例を挙げると、現在イギリスに在住するユン・チアンは、英語で『ワイルド・スワン』を書き、一時ブームになった<sup>98)</sup>。他に、日本では日本語で書く、邱永漢、楊逸、東山彰良等がいる<sup>99)</sup>。

中国で生まれた者が英語で優秀な作品を書くことができるのであるなら、中国で生まれた外国人が人を感動させる漢語作品を書くことも考えられる。現在、私たちは外国籍を持つ「中国通」（中国専門家）の方々に対し、視点を変えて見なければならぬ時期に来ているのであろう。これは「地球村」に暮らす人々にとって、避けて通れない運命であるのかもしれない。例え中国人、台湾人、華僑、華人、中華系の子孫あるいは日本人、欧米人、更には南米人、アフリカ人であろうと、才能があり、漢語で血の通う名著を書くことができれば、だれでも「世界漢語文学史」にその名が刻まれる資格を持つことができると言えよう。

また、「世界漢語文学史」の概念は、必ず「台湾文学史」、「中国文学史」及び「華文文学史」の上位概念となる必要がある。そうすれば、張愛玲の名は正々堂々と「世界漢語文学史」に書き入れられ、再び政治の影響を受けたり、別の問題が派生したりすることもなくなるであろう。中国と台湾の母語はいずれも「漢語」であるために、「漢語」で書かれた傑作には、そもそも誰が誰に属し、誰が誰を支配するといった問題は起らないであろう。つまり、「統一と独立」の問題は、絶対にこの関係に介入し得ない。張愛玲が「世界漢語文学史」に書き入れられることは、中国と台湾双方の文学界から歓迎されると、確信している。

最後に、「世界漢語文学史」と「世界華文文学史」の違いについて言及する。「漢語」とは純粋な文字言語の概念であり、「華文」も文字言語のことを指すものではあるが、「華」の文字には、国家の民族意識及び政治的な意味が含まれている。これは中国問題を研究している専門家や学者の周知の事実であろう。政治との関係を完全に絶ち切るため、筆者はあえて「世界漢語文学史」と命名するのが最も理想であると堅く信じている。

## 5 2015年の台湾と大陸出版の文学史

2008年以降、世界は目まぐるしく変化し、後述するように、2015年には中台とも張愛玲が文学史に入るかどうかの問題は、ほぼ解決されたかようになった。

<sup>98)</sup> ユン・チアン（張戎）、1952年3月生まれ、中国四川省出身。1978年より英国へ留学し、ロンドン在住。1991年『ワイルド・スワン』が全世界でベストセラーとなる。

<sup>99)</sup> 邱永漢（父邱清海、母日本人。1924年3月—2012年5月）は、台湾台南出身の作家、評論家、実業家である。1955年小説『香港』で外国人として初めて直木賞を受賞する。

楊逸（劉菝）、1964年6月生まれ、中国ハルビン出身。2008年、「時が滲む朝」で第139回芥川賞を受賞する。東山彰良（王震緒）1968年9月、台湾台北生まれ、台湾と日本を行き来する。2015年に『流』で直木賞を受賞する。

2001 年出版の『台灣文學作家年表與作品總錄 (1945-2000)』<sup>100)</sup>では、2256 名の作家の年表と作品目録があるが、p551 から p553 に張愛玲がある。2010 年 9 月に台湾の秀威資訊科技股份有限公司は、大陸学者叢書 18 として、程光偉他の『中國現代文學史 下編 (1937-1949)』を出版し、その p53 から p67 に張愛玲の記載がある。

台湾で 2015 年 2 月に出版された馬森著の『世界華文新文學史』(上編・中編・下編)では、21 か所で張愛玲の名前が取り上げられており、張愛玲が p602 から p606 まで第 22 章 4 節「上海孤島崛起的作家」 「抗戰與内戰時期的小説」で記載されている<sup>101)</sup>。

また、2015 年 3 月に中国大陸出版の『台湾女性文学史・精装』<sup>102)</sup>(厦门大学出版社)では、第 9 章第 2 節の「1980 年代的女性小説創作」の「1. 張愛玲, “三三” 与閩秀文学」にもその名がある。要するに、もはや台湾でも、大陸でも張愛玲を文学史に入れるのが当然の時代になった。

## VIII 結論

中国・上海出身の張愛玲は、「台湾文学史」に書き入れるのに必要とする基本的条件から見ると、彼女は「台湾文学史」に書き入れる資格がほとんどない。しかし、彼女が台湾文学界に与えた影響は、確かに大きいものがある。そのため、一部の文学界の関係者は、依然として彼女を「台湾文学史」に書き入れるべきである、と強く主張する。

1940 年代に最高に活躍した張愛玲は、国内外の国際情勢と政治に翻弄されたが、米国では「もし国民党と共産党との間に政治的分裂がなければ、彼女(張愛玲)はきっとノーベル賞を受賞していたであろう」と言われる<sup>103)</sup>。張愛玲の過酷な運命は、幼い頃からすでに始まっていた。幼少時代の彼女は両親の愛情を受けることなく、物心がついてからは、苦難の祖国と共に、この世の辛さと苦しみを体験してきた。彼女は有名になってから間もなく、愛情で挫折し、心身共に傷ついた。天才作家としての命運は夭折を余儀なくされたのである。彼女は心の拠り所—「紅樓夢の舞台」である祖国中国を離れ、植民地である香港の地に渡り、更に香港から米国に亡命して移り住み、安住の地を得た。まさか彼女は自分がこのような過酷な人生を送るとは最初から予想していなかったであろう。

彼女がまだ香港で放浪生活を送っていた時、英語で書かれた 2 本の作品『秧歌』と『赤地之恋』は、「反共」小説と「誤解」され、大きな論争を引き起こすことになり、彼女は苦悶し、決意を新たにして「共産中国」の隣にある香港を離れ、その後、未知の国—米国で暮らすこととなった。

<sup>100)</sup> 國家圖書館參考組編輯者『台灣文學作家年表與作品總錄 (1945-2000)』台湾・國家圖書館, 2001 年 3 月出版, p551-553.

<sup>101)</sup> 馬森著『世界華文新文學史—中國現代文學的兩度西潮』(中編・戰禍與分流: 西潮的中斷) p602-606. 台湾・印刻文學叢書, 2015 年 2 月初版, INK 印刻文學生活雜誌出版有限公司, p602-606.

<sup>102)</sup> 林丹妮主編『台湾女性文学史・精装』(『十二五』国家重点图书), 厦门大学出版社, 2015 年 3 月, p369-373.

<sup>103)</sup> ROBERT McG. THOMAS Jr. (1995 年 9 月 13 日) “Eileen Chang, 74, Chinese Writer Revered Outside the Mainland”. *The New York Times*. <http://www.nytimes.com/1995/09/13/obituaries/eileen-chang-74-chinese-writer-revered-outside-the-mainland.html>.

「反共」と人々に誤解された張愛玲のその2冊の小説は、ちょうど東西冷戦下における台湾のニーズに合致し、「張愛玲」という文学の種は「天の時」という利を得て、台湾に種を播くことができた。その後、夏志清と水晶の強力な推薦によって、張愛玲作品はブームを巻き起こし、「漢字文化圏」の文学愛好者のお気に入りとなった。

台湾文学界は張愛玲作品が花を咲かせ、実を結んだ地である。台湾は熱狂的な「張ファン」誕生の地であるばかりでなく、「張派」作家を育てた揺りかごの地でもある。張愛玲作品が台湾文学界へ与えた影響は大きく、今日まで衰えていない。もし、彼女が生まれも育ちも台湾の「いもっ子」でないということだけで、彼女を「台湾文学史」に書き入れるべきでないとしたら、誠に遺憾である。もしも「台湾文学史」に書き入れる条件に融通が利かないのであれば、「台湾文学史」の「辺境」の場にて、暫定的に彼女を受け入れてほしいと思う。そうすることによって、台湾の「張ファン」と「張派」作家が張愛玲に対する敬慕の念を示す機会を与えられることになる。

中国大陸では、張愛玲の名誉はまだ完全に回復されていないようだが、いつの日か中国文学の領域に政治的対立が無くなれば、張愛玲が正々堂々と「中国文学史」に書き入れられる可能性はあると2007年当時に確信していた。中国大陸と台湾の政治的対立が解決されていないため、張愛玲には今しばらく「台湾文学史」の「辺境」に書き入れることで我慢してもらい、政治問題が円満に解決したら、彼女の位置付け問題も直ちに解決が得られると当時思っていた。筆者はもちろん、このような暫定的な融通を利かせた方法は、決して理想的な考えではないことを承知している。時代がすでに「地球村」という新時代に入っている現代だからである。そこで「世界漢語文学史」という新分野を構築し、完全に言語文字を基準とすることで、漢語の名作家の文学史における位置付けの確立と評価するのがよいと考える。

ところが、2008年以降、急激な世界情勢の変化により、中国が2012年に万博を成功させ、GDPが世界第2位になり、国力を増してきた。兩岸問題がいまだ未解決の状態にあっても、2015年現在、台湾でも大陸においても、もはや張愛玲を文学史に入れるのは、当然のこととなった。台湾と大陸の兩岸問題は解決せず、政治実体が異なる現状であるが、張愛玲は政治の対立を乗り越えて、以前の無視や抹殺から、もはや、大陸と台湾の両方からその存在を認識させられるように変化してきたのである。小説が政治的でない内容であるから、純文学的に物語として張愛玲の価値が承認されたというべきか、或いはどんな政治であっても、光輝く存在として、両方から利用価値があるとみなされるようになったのか、歴史のイデオロギーに関わらず、冷静に客観的に中立して事実を見つけることの大切さが認められようになったためであろう。文学が政治に左右されるのはよくないという正論が時代の変化とともに公認されてきたともいえよう。また、張愛玲の読者が増え続け、台湾でも大陸でもきちんと張愛玲を文学史に記載して評価しようとする方向がでてきたこと、つまり読者の熱意が文学史を追従した自然な流れなのかもしれない。

21世紀の今日、「地球村」はすでに一つの運命共同体となっており、ふたたび出生地、国籍、居住地、政治意識、宗教・信仰または肌の色の違いによって、互いを分け隔て、対立を作り出すことは好ましくないであろう。「世界漢語文学史」という新分野が構築されるなら、張愛玲の文学史における位置付け

の問題はたちまち解決されるばかりか、今後「地球村」のどの住人も、漢字を巧みに用いて不朽の名作を著せば、誰であっても「世界漢語文学史」の中に書き入れられ、どのような政治的要素の干渉も受けなくなる、と考える。「文学は政治に奉仕すべきである」という考えを超越するために、「世界漢語文学史」の創設は不可欠であろう。

「漢字文化圏」の中の文学は、有史以来ずっと政治に弄ばれ利用されてきた。しかし、それは中央集権統治の封建時代において、止むを得ない状況で形成されたものである。張愛玲は、不運な星の下に生まれ、不安定な政治に生涯弄ばれ、利用されてきた。彼女には彼女ならではの個性、人生観、生活哲学があり、誰も干渉できない。政治が文学に関与することこそ、この悲劇の禍根なのである。政治と文学は、境界を明確にし、それぞれ独立し、互いに干渉も利用もしないようにするべきであろう。それでこそ、「純文学」に発展の余地ができ、真の文学者と漢語文学作品が絶え間なく生まれるようになるであろう。筆者は第三者の立場から、この張愛玲の文学史上における位置付けの問題が、公平かつ合理的に扱われ、公正な評価が与えられるよう心から願う。2015年になり、ようやく張愛玲が正々堂々と、冷静に客観的に歴史的事実の一コマとして、大陸と台湾の両方の文学史にその名が記載されることになったことを嬉しく思う。

張愛玲ひとりを取り上げて世界漢語文学を論じきれないことは充分承知している。だが、張愛玲は「中国文学」「台湾文学」「華語文学」「華文文学」「華人文学」などのすべての境界線を行き来できる、垣根の壁をあいまいにしてくれる作家である。グローバル世界の今、中国現代文学の輪郭をあいまいにする、まさに人や民族の往来が国境を超えることを実現してくれた、一国に留まらず世界への窓を開放してくれる貴重な作家である。

## 付記

米国は、Center for Taiwan Studies, University of California Santa Barbara で2007年10月26日と27日に開催された国際会議にて、「張愛玲を『台湾文学史』に書き入れるべきか？－世界漢語文学史創設の可能性についても論じる－」と題する論文を口頭発表した。その論文を『*Taiwan Studies in Global Perspectives*』（『台湾研究全球化的国際観察』, p191-207）に中国語にて寄稿した。本稿はそれを土台にしつつ、2016年春に新しい資料を追加し修正し、日本語で書いたものである。

国際会議の参加と拙論の掲載を承諾してくださいました UCSB の杜國清教授に心より感謝の意を表します。

References 出版年順

書籍

- 張愛玲著，柏謙作訳（1955）『赤い恋』生活社。  
張愛玲著，並河亮訳（1956）『農民音楽隊』時事通信社。  
藤井省三編集監修，清水賢一郎，上田志津子訳（1991）『浪漫都市物語—上海・香港 40S』発見と冒険の文学5，JICC 出版局。  
藤井省三編訳（1992）『笑いの共和国：中国ユーモア文学傑作選』白水社。  
下村作次郎（1994）『文学で読む台湾』田畑書店。  
中川昌郎（1995）『台湾をみつめる眼 増補新版』田畑書店。  
池上貞子（1995）『傾城の恋』平凡社。  
中国文芸研究会編（1995）『原典で読む・図説 中国 20 世紀文学—解説と資料—』白帝社。  
岡崎郁子（1996）『台湾文学—異端の系譜—』田畑書店。  
今福竜太編，垂水千恵訳（1996）『世界文学のフロンティア〈4〉ノスタルジア』岩波書店。  
高全之（1997）『王禎和の小説世界』三民書局。  
藤井省三，大木康（1997）『新しい中国文学史—近世から現代まで—』ミネルヴァ書房。  
蔡鳳憶編（1997）『華麗與蒼涼—張愛玲紀念文集—』皇冠文化出版有限公司。  
藤井省三（1998）『台湾文学この百年』東方書店。  
前野直彬編（1998）『中国文学史』東京大学出版会。  
陳義芝主編（1999）『台灣文學經典研討會論文集』行政院文化建設委員會，聯經出版事業公司。  
丸山昇監修，伊禮智香子訳（2000）『中国現代文学珠玉選小説2』二玄社。  
葉石濤著，中島利郎，澤井律之訳（2000）『台湾文学史』研文出版。  
夏志清著，劉紹銘等訳（2001）『中國現代小説史』香港中文大學出版社。  
丸山昇監修，丸尾常樹訳（2001）『中国現代文学珠玉選小説3』二玄社。  
陳芳明（2002）『後殖民台灣—文學史論及其周邊—』麥田出版。  
鄭万鵬著，中山時子，伊藤敬一，藤井栄三郎，李玉敬訳監修（2002）『中国当代文学史—建国より 20 世紀末までの作家と作品』白帝社。  
古蒼梧（2002）『今生此時今世此地：張愛玲，蘇青，胡蘭成的上海』Oxford University Press，牛津大學出版社，Hongkong。  
邵迎建（2002）『伝奇文学と流言人生—1940 年代上海・張愛玲の文学』お茶の水書房。  
金宏达編（2003）『回望张爱玲 华丽影沉』文化藝術出版社。  
山口守編（2003）『講座 台湾文学』国書刊行会。  
宇野木洋，松浦恆雄編（2003）『中国二〇世紀文学を学ぶ人のために』世界思想社。  
錢理群，吳曉東著，趙京華，桑島由美子，葛谷登訳（2003）『新世紀の中国文学—モダンからポストモダンへ—』白帝社。  
葉石濤（2003）『台灣文學史綱』春暉出版社。  
阪口直樹（2004）『中国現代文学の系譜—革命と通俗をめぐる—』東方書店。  
平鑫濤（2004）『逆流而上』皇冠文化出版有限公司。  
中国女性史研究会編（2004）『中国女性の 100 年—史料にみる歩み—』青木書店。  
張愛玲著，方蘭訳（2004）『半生縁—上海の恋』勉誠出版。  
劉紹銘，梁秉鈞，許子東編（2004）『再讀張愛玲』山東畫報出版社。  
彭瑞金（2004）『台灣新文學運動 40 年』春暉出版社。  
胡蘭成（2004）『今生今世』遠景出版。  
山田敬三編（2004）『境外の文化—環太平洋圏の華人文学—』汲古書院。  
莊萬壽，陳萬益，施懿琳，陳建忠（2004）『台灣的文學』群策會李登輝學校。  
藤井省三（2005）『20 世紀の中国文学』放送大学教育振興会。  
松永正義（2006）『台湾文学のおもしろさ』研文出版。  
吉田富夫（2007）『中国現代文学史 1915-49』朋友書店。  
林幸謙編（2007）『張愛玲：文學・電影・舞台』Oxford University，牛津大學出版社，Hongkong。  
張愛玲著，南雲智訳（2007）『ラスト，コーション 色・戒』集英社。  
池澤夏樹編，垂水千恵訳（2010）『世界文学全集—短編コレクション1』第3集5巻，河出書房新社。

- 池上貞子 (2011) 『張愛玲—愛と生と文学』 東方書店。  
陳芳明 (2011) 『台灣新文學史』 上 聯經出版事業股份有限公司。  
藤井省三 (2011) 『中国語圏文学史』 東京大学出版会。  
邵迎建 (2012) 『張愛玲の傳奇文學與流言人生』 秀威資訊科技出版社。  
洪子誠著, 岩佐昌暲, 間ふさ子他訳 (2013) 『中国当代文学史』 東方書店。  
中島利郎, 河原功, 下村作次郎編 (2014) 『台湾近現代文学史』 研文出版。  
馬森著 (2015) 『世界華文新文學史』 (上編・中編・下編) 台灣・印刻文學叢書, INK 印刻文學生活雜誌出版有限公司。  
林丹妮主編 (2015) 『台灣女性文学史・精裝』 (『十二五』 国家重点图书) 厦門大学出版社。

### 雜誌, 論文等

- 黃得時 (1943) 「台灣文學史序說」 『台灣文學』 3 卷 3 號。  
杜国清 (1997) 「中国と世界華文文学」 『未名』 15 号, 中文研究会。  
廖咸浩 (1999) 「迷蝶: 張愛玲傳奇在台灣」 『當代』 147 期。  
陳秋雯 (2005) 『張愛玲小説在台灣の接受現象』 台灣・國立中山大學中國文學研究所碩士論文。  
彭明敏・中嶋嶺雄 対談 (2005) 「『中華世界』からの離脱という世界史の実験は成功するか」 『中央公論』 11 月号, 中央公論新社。  
任佐卿 (2006) 「國族的界限和文學史: 論建構台灣新文學史與張愛玲研究」 『文化研究』 第 2 期, 遠流出版。  
CiNii Dissertation 検索, 2016 年 4 月 7 日データ取得。

### 新聞記事等

- ROBERT McG. THOMAS Jr. (1995 年 9 月 13 日) “Eileen Chang, 74, Chinese Writer Revered Outside the Mainland”. *The New York Times*. <http://www.nytimes.com/1995/09/13/obituaries/eileen-chang-74-chinese-writer-revered-outside-the-mainland.html>.  
賴素鈴 (1999 年 3 月 20 日) 「張愛玲算不算台灣作家?」 『民生報』 19 版藝文新聞, 聯合知識庫, <http://udndata.com>. 2006 年 7 月 28 日データ取得。  
蔡美娟 (1999 年 3 月 20 日) 「搶救台灣文學」記者會, 是誰之「經」? 何人在「典」? 台灣筆會等團體發表聲明」 『聯合報』 03 版焦點, 聯合知識庫, <http://udndata.com>. 2006 年 7 月 28 日データ取得。  
張殿 (1999 年 3 月 22 日) 「注視張愛玲」 『聯合報』 41 版讀書人周報, 聯合知識庫, <http://udndata.com>. 2006 年 7 月 31 日データ取得。  
陳至中 (2015 年 3 月 21 日) 「中高生の 9 割が『自分は台灣人』 = 社団法人調査」 『中央フォーカス台湾』 兩岸・社会, 18 時 18 分配信. <http://japan.cna.com.tw/search/201503210005.aspx?q=%E8%87%AA%E5%88%86%E3%81%AF%E5%8F%B0%E6%B9%BE%E4%BA%BA>  
大月克巳 (2015 年 9 月 1 日) 「高まる台湾アイデンティティー 警戒する中国—来年 1 月に総統選」 特派員リレー報告 (45) 『メディア展望』 NO.645.  
翻訳・編集/柳川 (2016 年 3 月 15 日) 「『自分は台灣人』 20 年間で最高の 73% に, 『中国人』 は 22% — 台湾世論調査」 Record china, 19 時 40 分配信. <http://sp.recordchina.co.jp/newsinfo.php?id=131093&ph=0>

### 辞典・事典等

- 『中国文学小事典』 (1972) 高文堂出版社。  
『新潮世界文学小辞典』 (1982) 新潮社。  
『中国現代文学事典』 (1985) 東京堂出版。  
『増補改訂 新潮世界文学辞典』 (1990) 新潮社。  
『集英社 世界文学大事典 2』 (1997) 集英社。  
『岩波 現代中国事典』 (1999) 岩波書店。

- 『台湾文學作家年表與作品總錄（1945－2000）』（2001）台灣・國家圖書館。  
『集英社世界文学事典』（2002）集英社。  
『作家名から引ける世界文学全集案内 第Ⅱ期』（2004）日外アソシエーツ（株）。  
『最新海外作家事典 新訂第4版』（2009）日外アソシエーツ（株）。

### VHS・DVD

- 傾城の恋（1993）ポニーキャニオン  
赤い薔薇白い薔薇（1996）エスピーオー  
傾城の恋（2004）キングレコード  
フラワーズ・オブ・シャンハイ（2005）松竹  
ラストコーション（2008）ビクターエンターテイメント  
傾城の恋 上海ロマンス BOX 1（2010）ビクターエンターテイメント  
傾城の恋 上海ロマンス BOX 2（2010）ビクターエンターテイメント